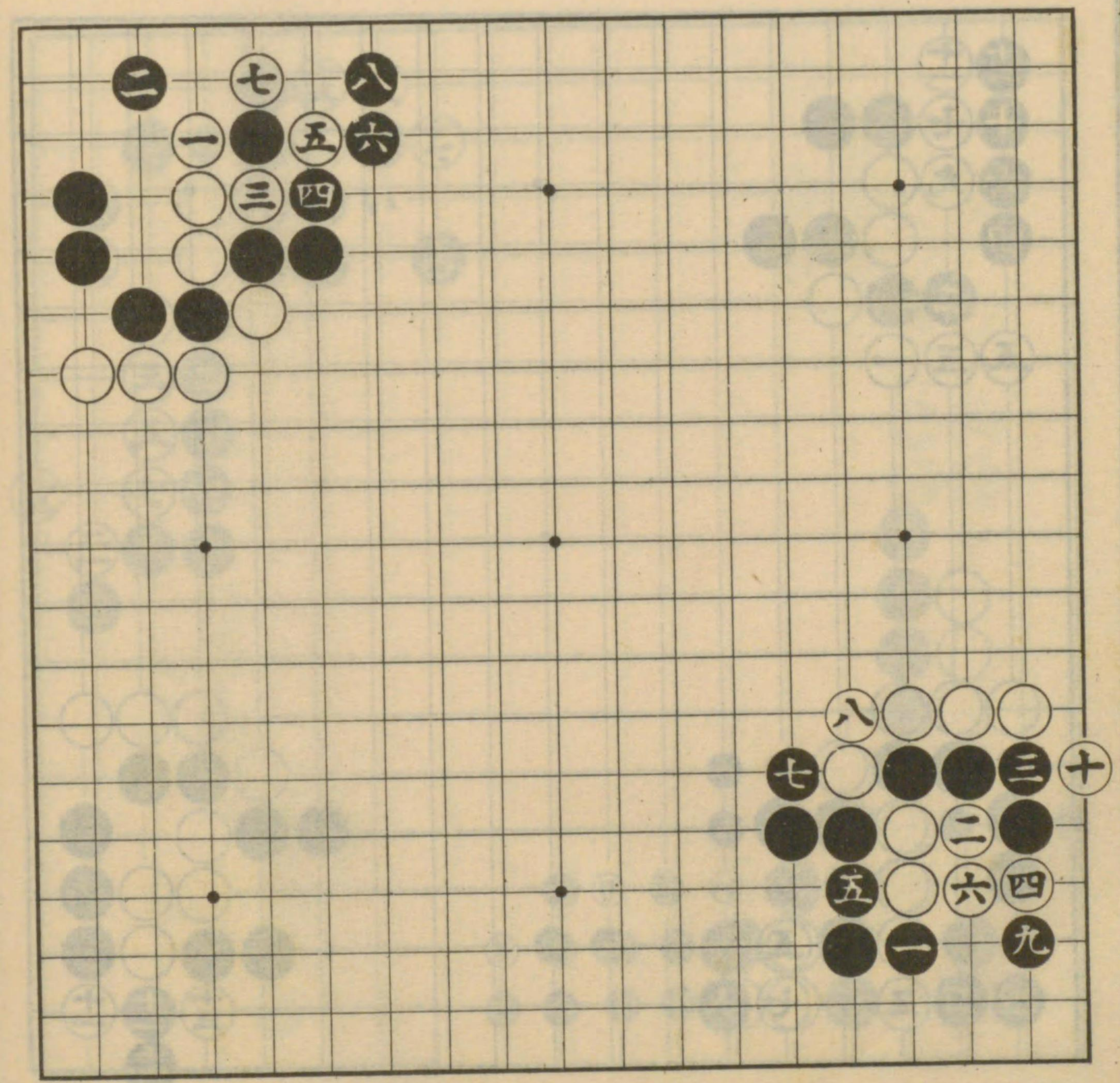
（第七十六圖）白三・五と出切つて七と提つても黒は八まで平易に應じてゐて白の全滅なる事も疑ひありません。

右下隅は黒一にて四に竝ばずに一を先にした變化。三子を捨て締付ける註文です。

白十までの得失は隣隅の配置關係に依る事が大きい。右上隅に白の締りあらば黒不利です。また左下隅に黒の勢力を假定しても第七十一圖上隅黒四の一子が働き無き愚形と化してゐる點は看過できない。部分的には黒もさして悪からねど考へ物です。



（第七十七圖）白一と單に約込む型。黒は征に抱へ得れば二・四と打拔いて最も簡明です。

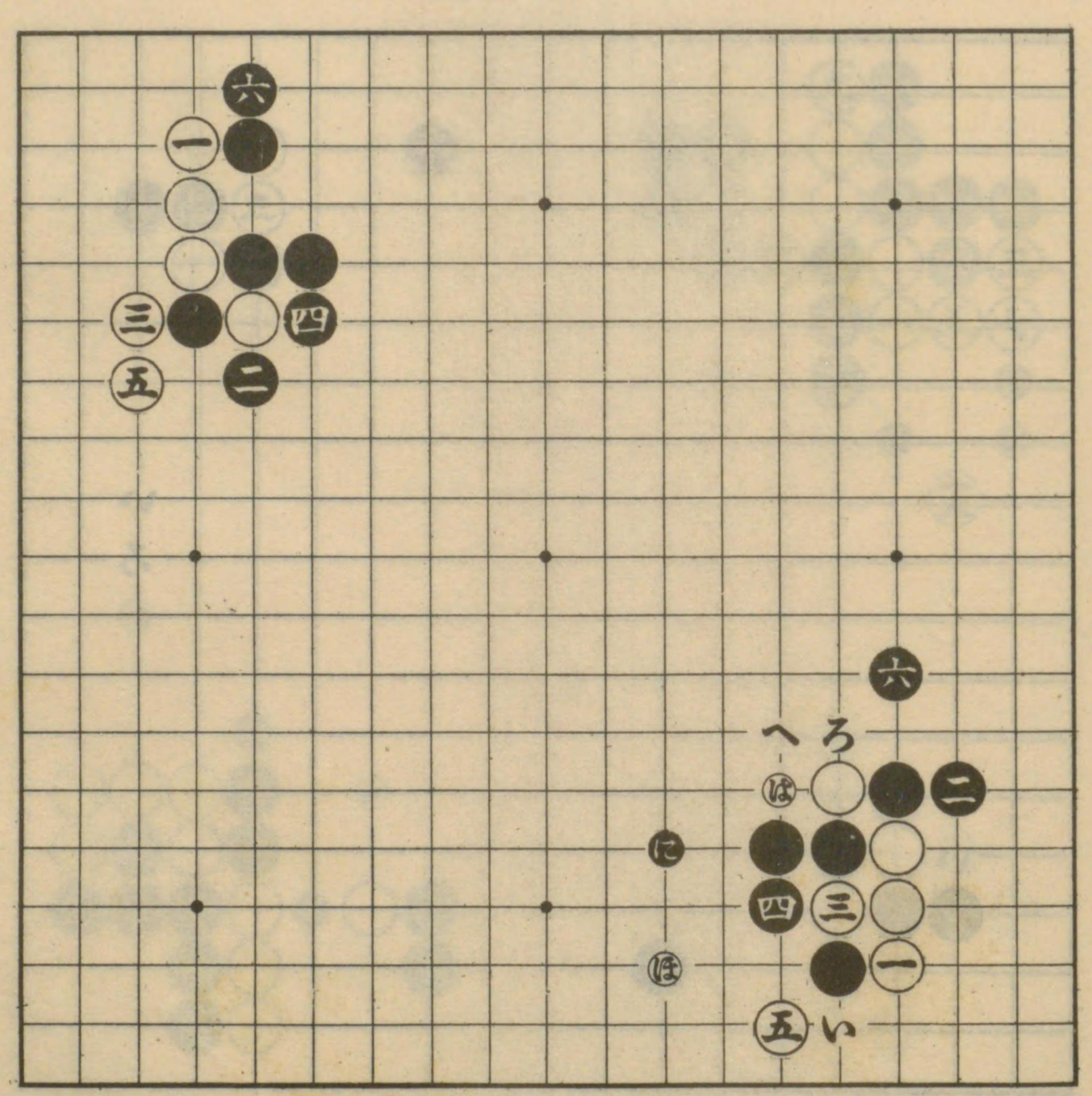
右下隅は黒二と下る變化。

白三・五の手順が矢張り肝要であつて單に五だと、後には黒いと遮られる恐れがあるのです。

黒六は若し征關係が有利ならばこゝでろと抱へて宜しい。征悪しくば六と飛ぶ形。

六に次で白はならば黒に、又白はをほならば黒へと取切つて充分の姿です。

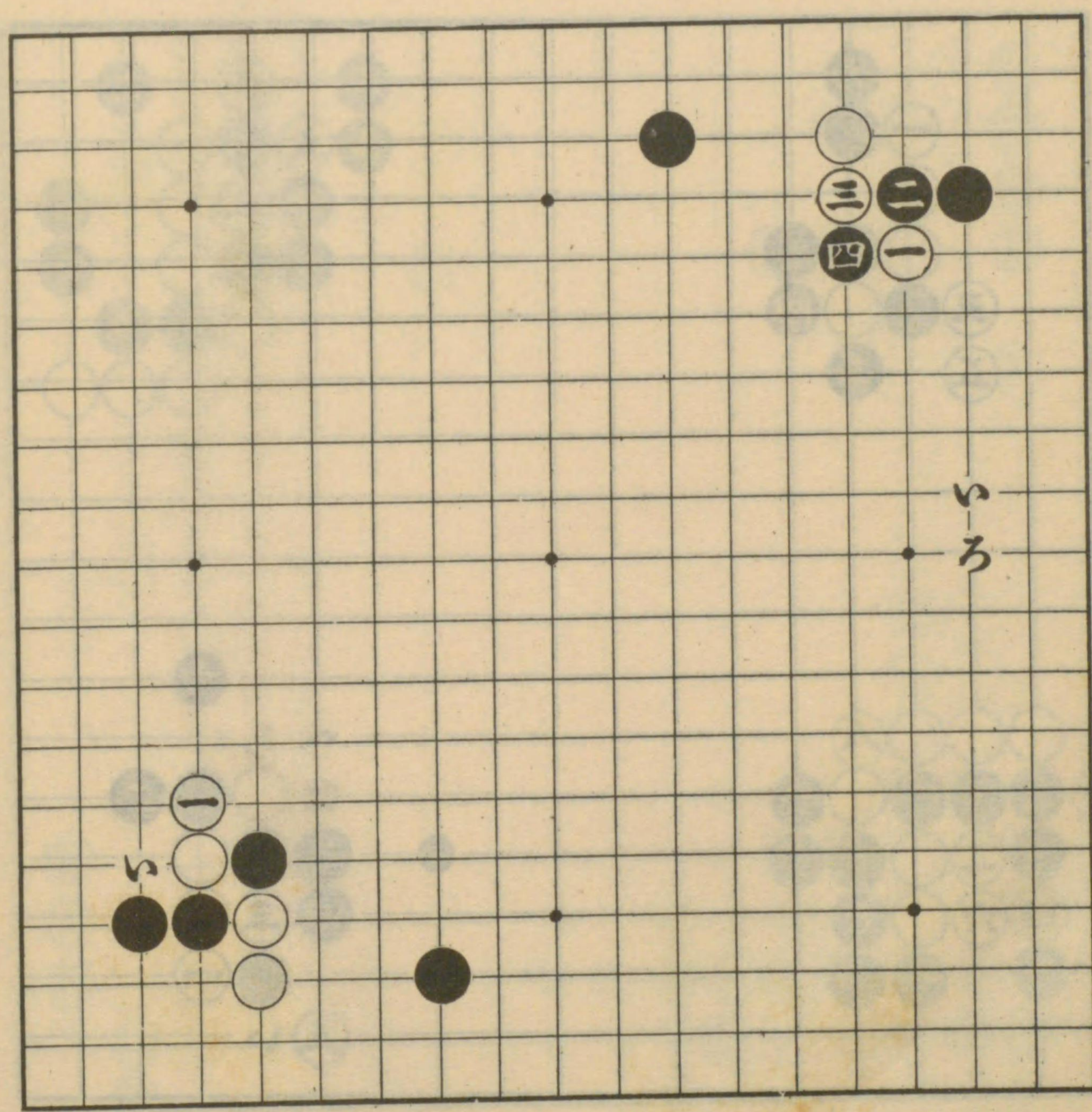
定石としては先づ以上を心得て置けば足りるでせう。



中巻二間夾第五十七圖白**一**の小斜走掛に對し黒**二・四**と出切る變化の研究。二間夾第百十五圖に續いて順を逐ひます

（**第百十六圖**）黒**二・四**の出切りは側邊**い**若しくは**ろ**の方面に黒の控へが無くては無理といふ古來の定說でありますが、これは必ずしもさうと斷定し得ないたゞその變化が難解なる所から左様に取扱はれて來たものであらうと考へる。

白の應手は下隅**一**の外に**い**もあります。

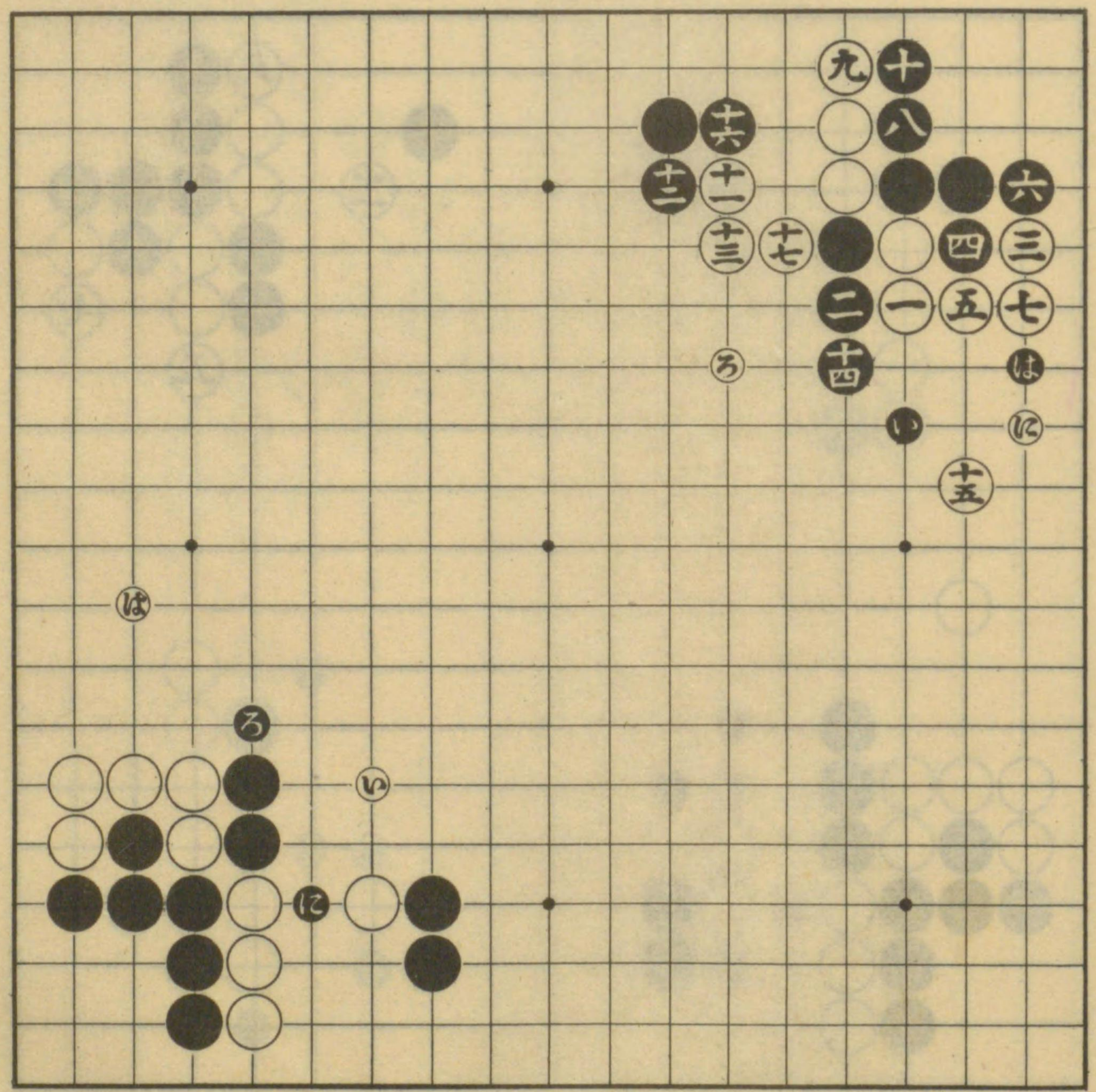


（**第百十七圖**）黒**二**を**十七**に引く變化は第百四十四圖以降に。白**三**は第百十九圖以降の行びを先にする方が優ります。

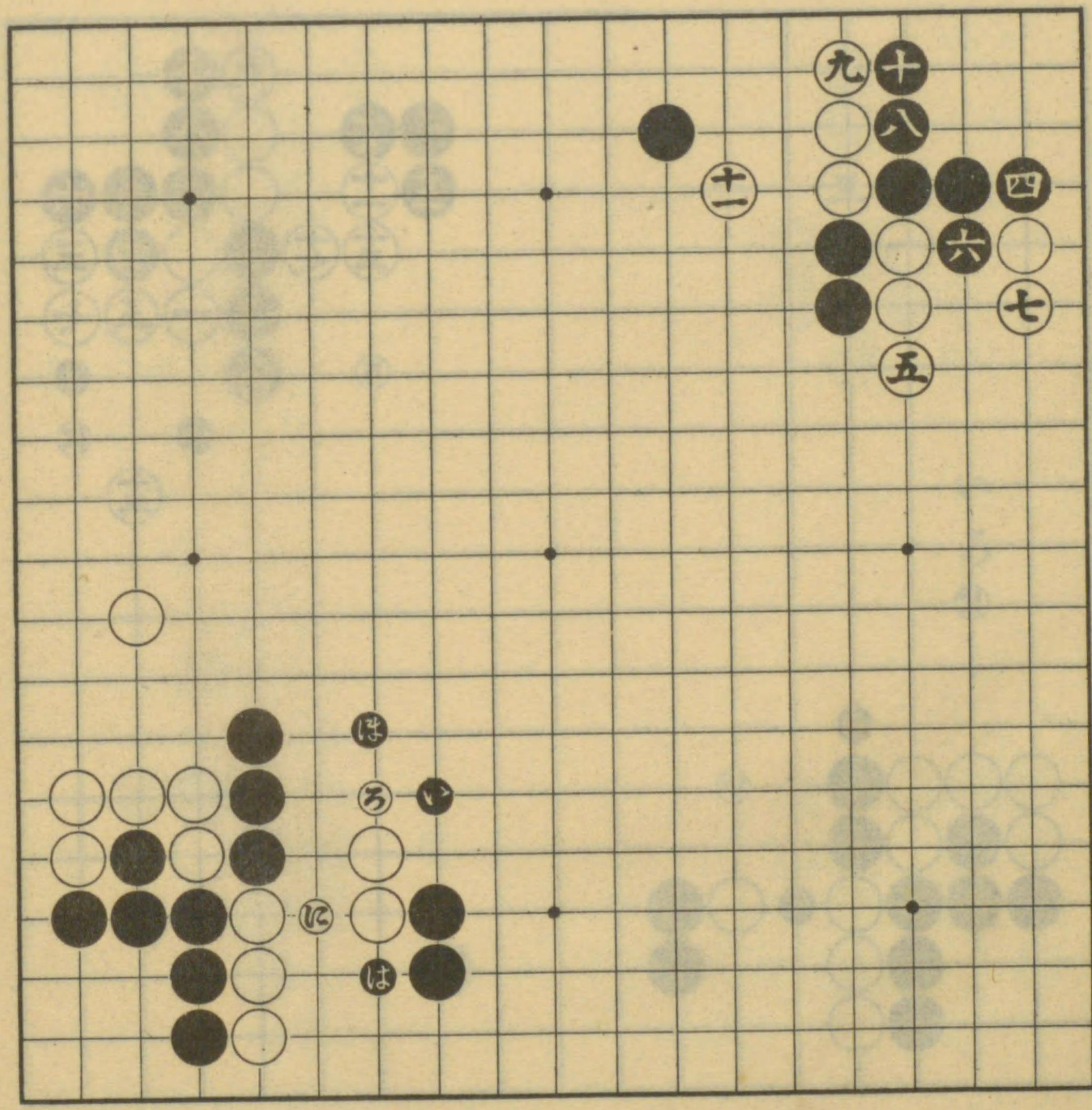
黒**四・六**に就ては次圖上隅參照

黒**八**より**十二**迄は必然として白**十三・十七**の愚形は忍びない様ですが**十三**にて下隅**い**に飛ぶと黒**ろ**白**は**と利く關係を以て黒**に**の綰込に依り三子を取られます

黒**十六**を利かせた形は快心なれど白**十七**に次いで黒**い**・**は**を打つも白**に**にて凌がれる。但し同時に隅の黒も完全に活きる關係はあります。この點、白稍拙。



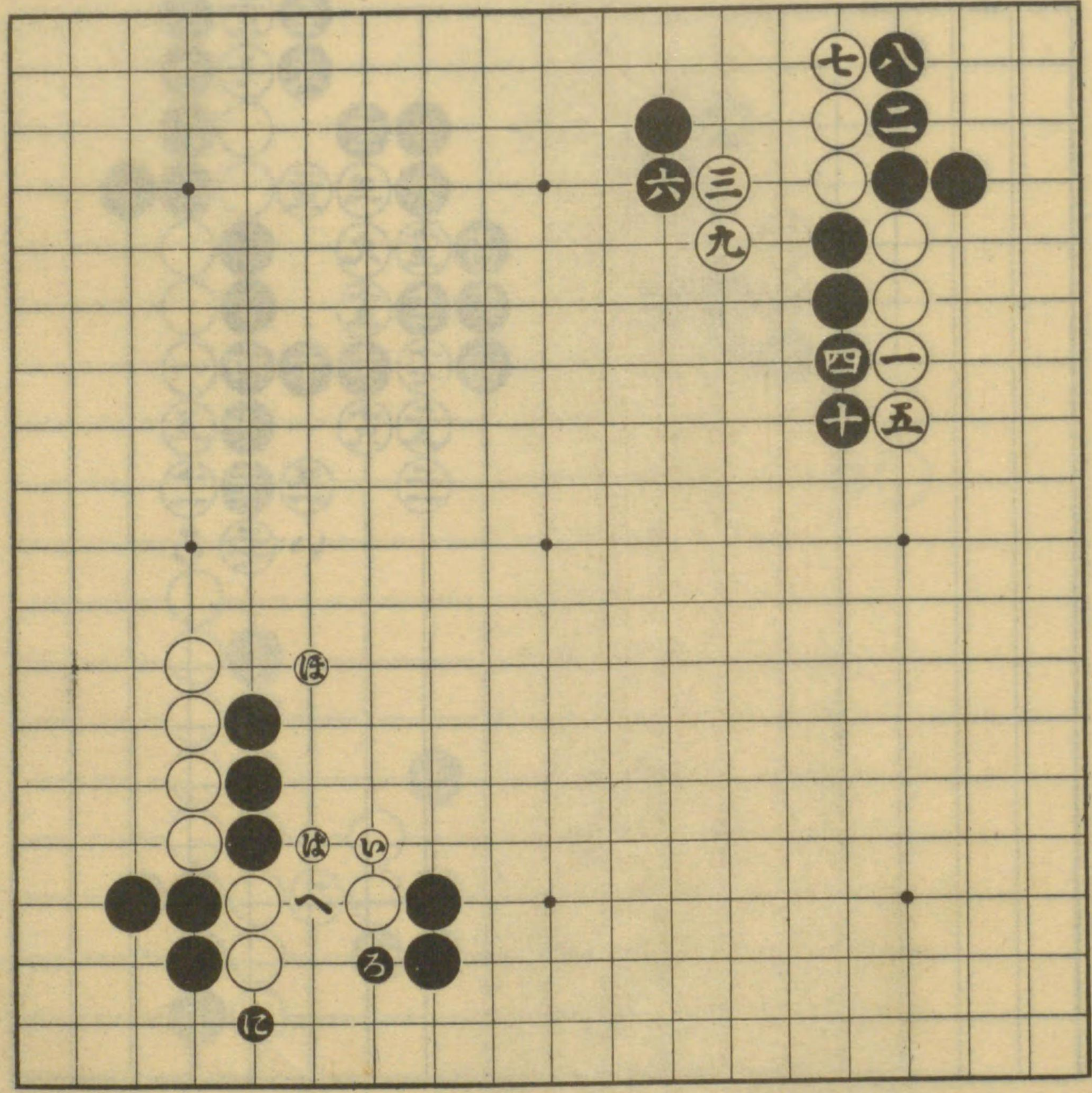
（第百十八圖）黒**四**と單に約へれば白**五**と行びられる。後から**六**と出ても白**七**と引かれるから白**十一**以下の歸結に拘らず隅には劫の手段が殘ります。前圖上隅は黒いはを直に打つか否かは別として、完全なる活路が保たれる可能性を存するだけ本圖よりは黒有利なる理。然し勿論比較論であつて前圖が絶對的に黒有利といふのではありません。下隅は前圖黒**十六**にていと掛けて見たのですが無理です。黒はの强硬が破綻に終ることを確められたい。



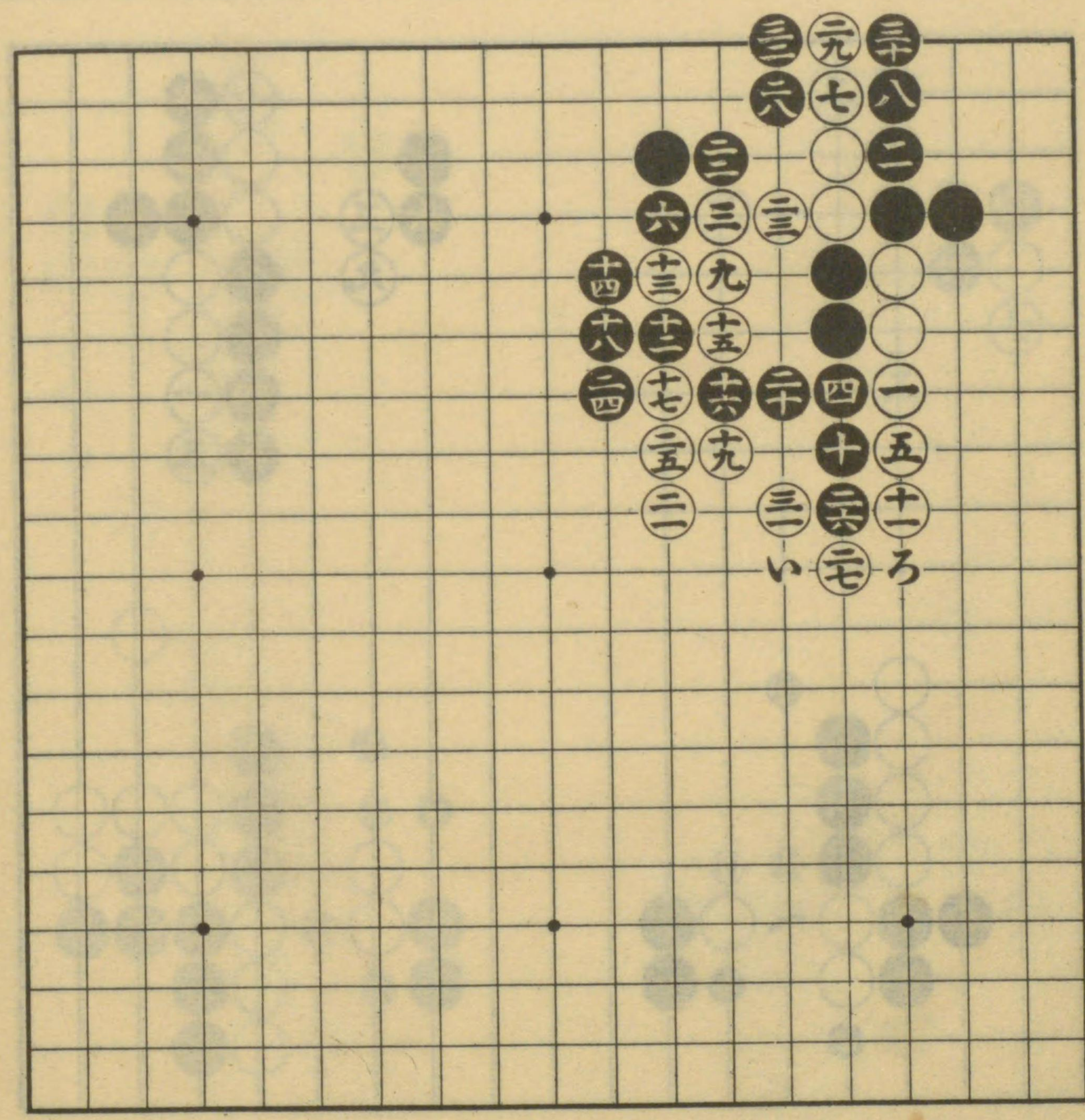
（第百十九圖）白**一**の行を先にする。黒**二**は續いて**四**に押す變化があります。其方が普通でもある。第百卅二圖以降に示す。黒**六**は**十**の押しと、何れを先にすべきかといふ所。第百卅一圖をも參照せられたい。

白**七**手順。左下隅に注意する。黒**八**も絶對です。此手で**九**に約へても白**八**と曲られると隅は死を免れない。以下次圖に。

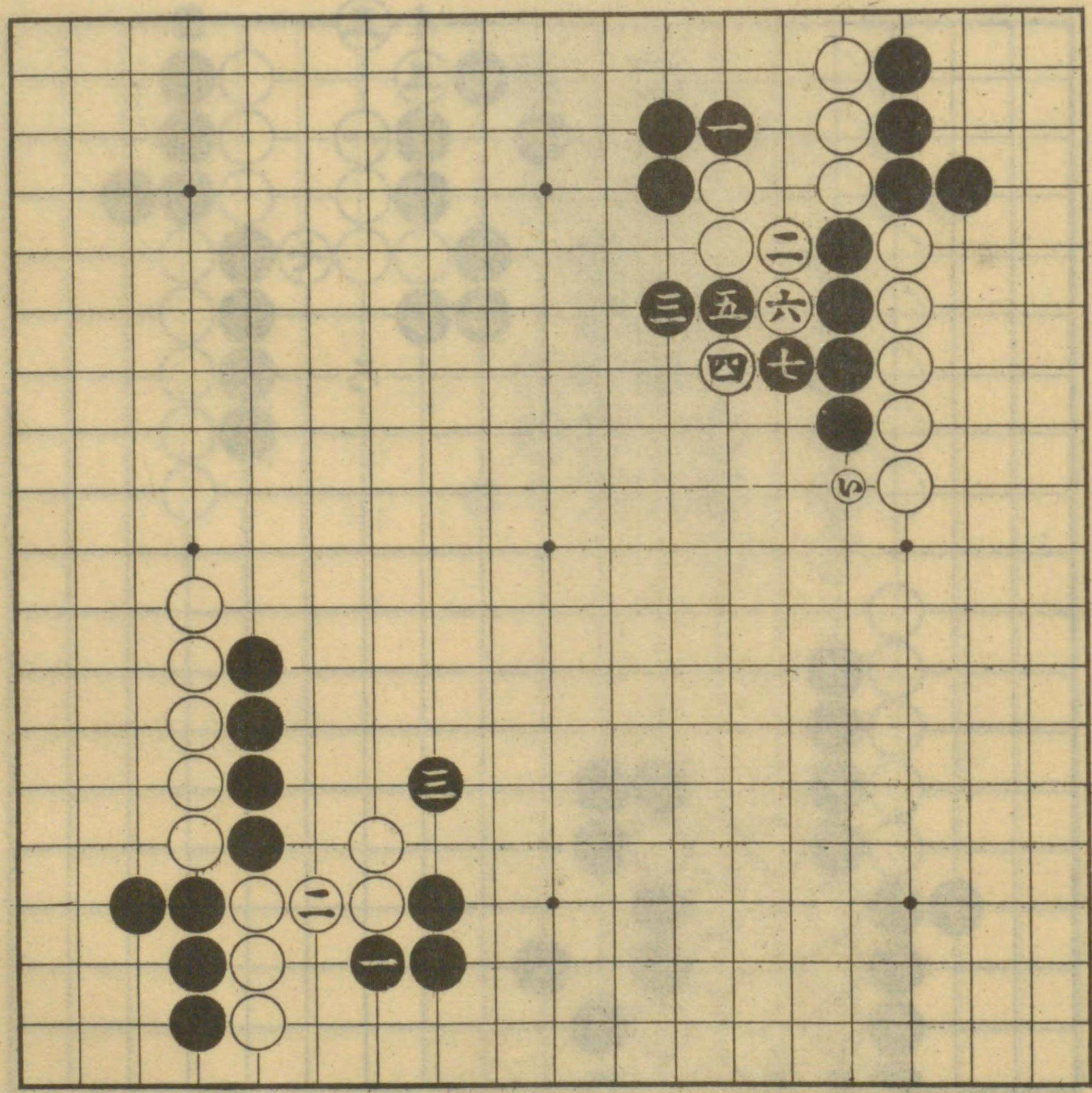
下隅白いを先にすると好便に黒ろを打たれ白はほは成立しません。はをへに粘げば白は第百廿二圖の變化を制限される理。



（**第百二十圖**）白**十一**を怠つて黒に玆を約へられ更に二段綽の嚴しきを被つては大變です。黒**十二**にて**二二**の曲りを先にする意味に就ては次圖上隅參照。白**十三**・**十五**を手順とする。但し黒**十四**及び白**十五**に就ての變化は第百廿二圖以降順次に。黒**十六**を**十七**に引く變化は第百廿五圖に。白**十七**以下は必然です。黒**三二**まで持となる。隅は完全に活きられてゐるし、**い**・**ろ**の斷點を有するのでこの結果は必ずしも白有利とは觀られません。



（**第百廿一圖**）黒**三**と掛ける前に**一**の曲りを先にする。白**二**と應じ、以下黒**七**と切つた時に白(い)の征が成立するか否かそれが先決問題です。征が白に有利ならば直ちに黒**一**・**三**の無謀に外なりません。白の側からすると征は不利としても、然る場合には**四**にて**七**に飛頂ければ凌ぎ得ます。征白に不利として下隅**二**と繫ぎ黒**三**と掛ける事になれば結局前圖に歸するとして、次圖以降の變化を制限し得るだけ黒**一**が働いた理。**一**の利害は難解です。



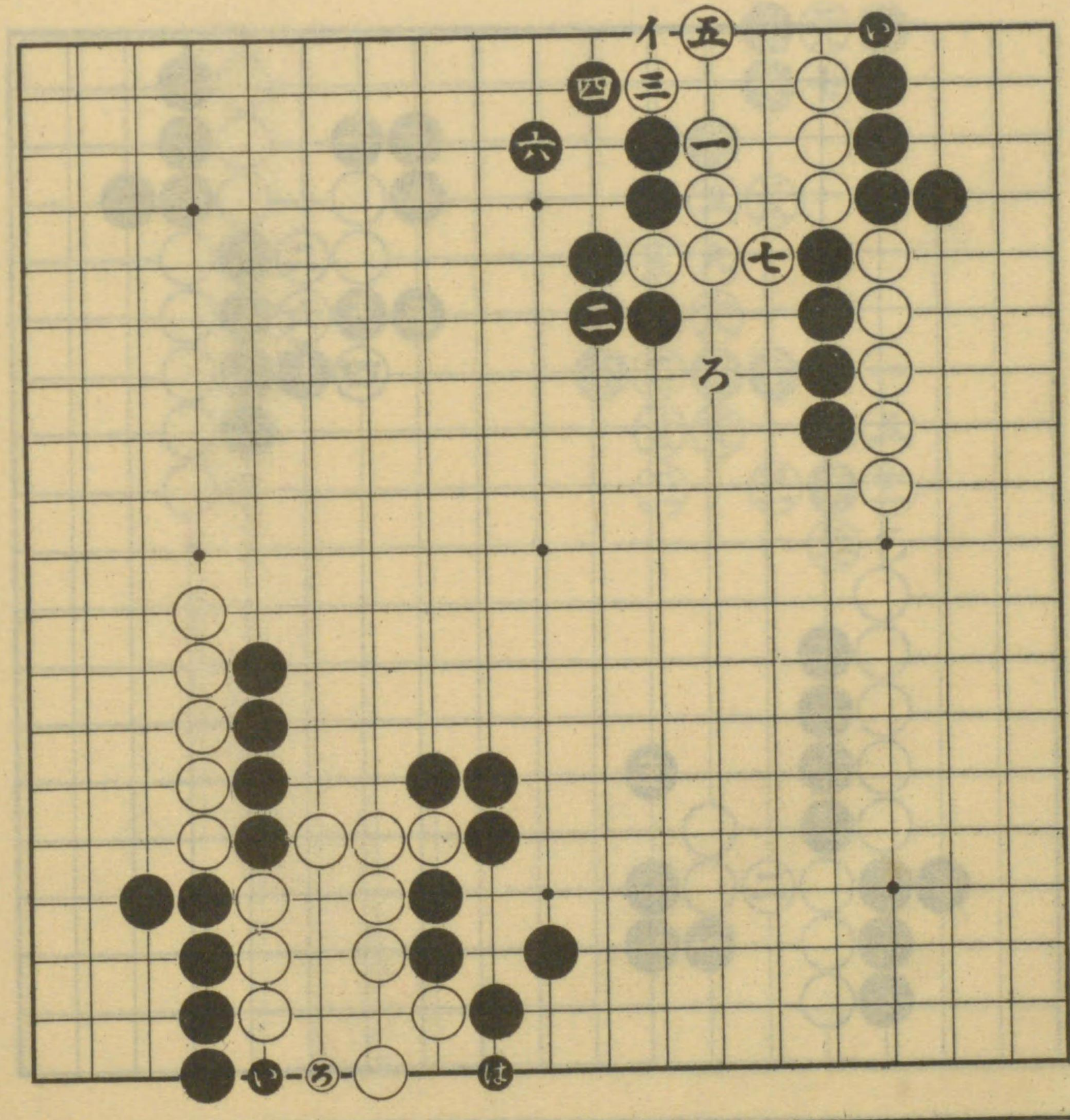
（**第百廿二圖**）前々圖白**十五**にて**一**と約込む變化。

黒**二**を**三**に下れば次圖です。

白**五**を**イ**に下つても結局黒**い**の下りは利かされる。從つて隅は完全の活きです。**ろ**方面が未定なる限りその關係が直接には現れぬとしても黒の安心する所。

白**七**に次いでの黒の著點は考へません。然し此歸結に不滿ならば黒は前々圖**十四**の變化がある即ち第百廿五圖下隅以降。

黒**い**が利く事は下隅に依て證される。白が手を拔けば黒**は**まで死は明らかです。



（**第百廿三圖**）黒**一**と下る變化

黒**三**は今度は**四**に約へる譯に行きません。第百二十圖との差。

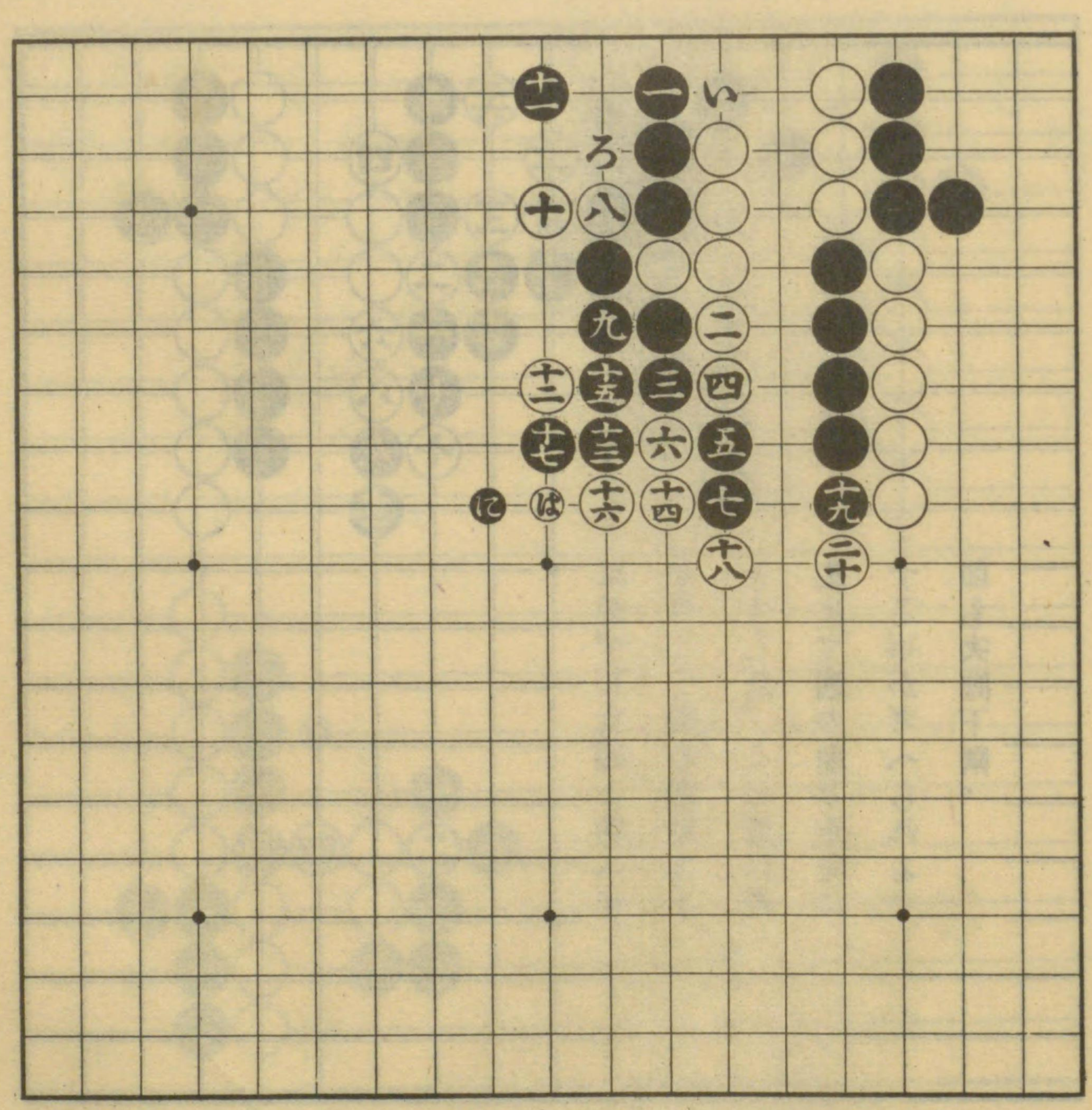
黒**七**も絶對です。

黒**九**の變化としては次圖がある

黒**十一**を**い**に曲ると白**ろ**と沿はれて手が足りない。

白**十二**の著理があつて難解を極めます。黒**十三**と綻出して**六**・**十四**を征に取り得るのでなければ黒の失敗に終る。征惡しく**十五**と粘いでは白**二十**迄となつて持にあらず完全の黒取られです

白**十八**にて**は**に押すと黒**に**が加はるからこれは白の破綻。

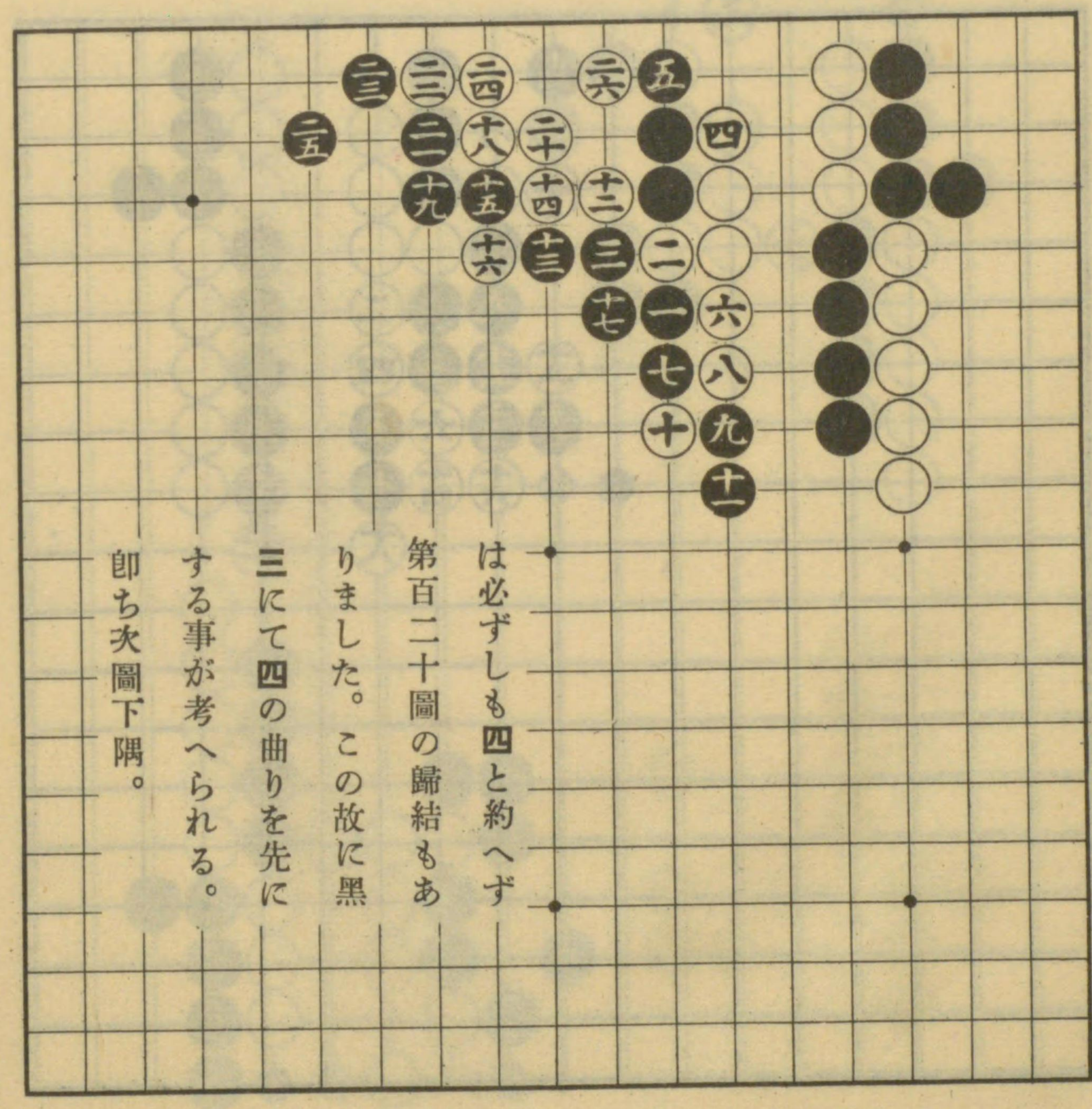


（第百廿四圖）前圖黑**九**にて**十三**と引く變化。

黑**十七**と粘がざるを得ないのは辛い形である。

白**二六**までとなつて黑三子は取られです。勿論實戰にあつては左上隅の條件が加はりますから黑**二五**等省略し得るかも知れぬと同時に白にも一層有利なる條件さへ考へねばなりません。黑の外勢といふ樣な事は別問題として部分的には兎も角も黑の失敗とすべきである。

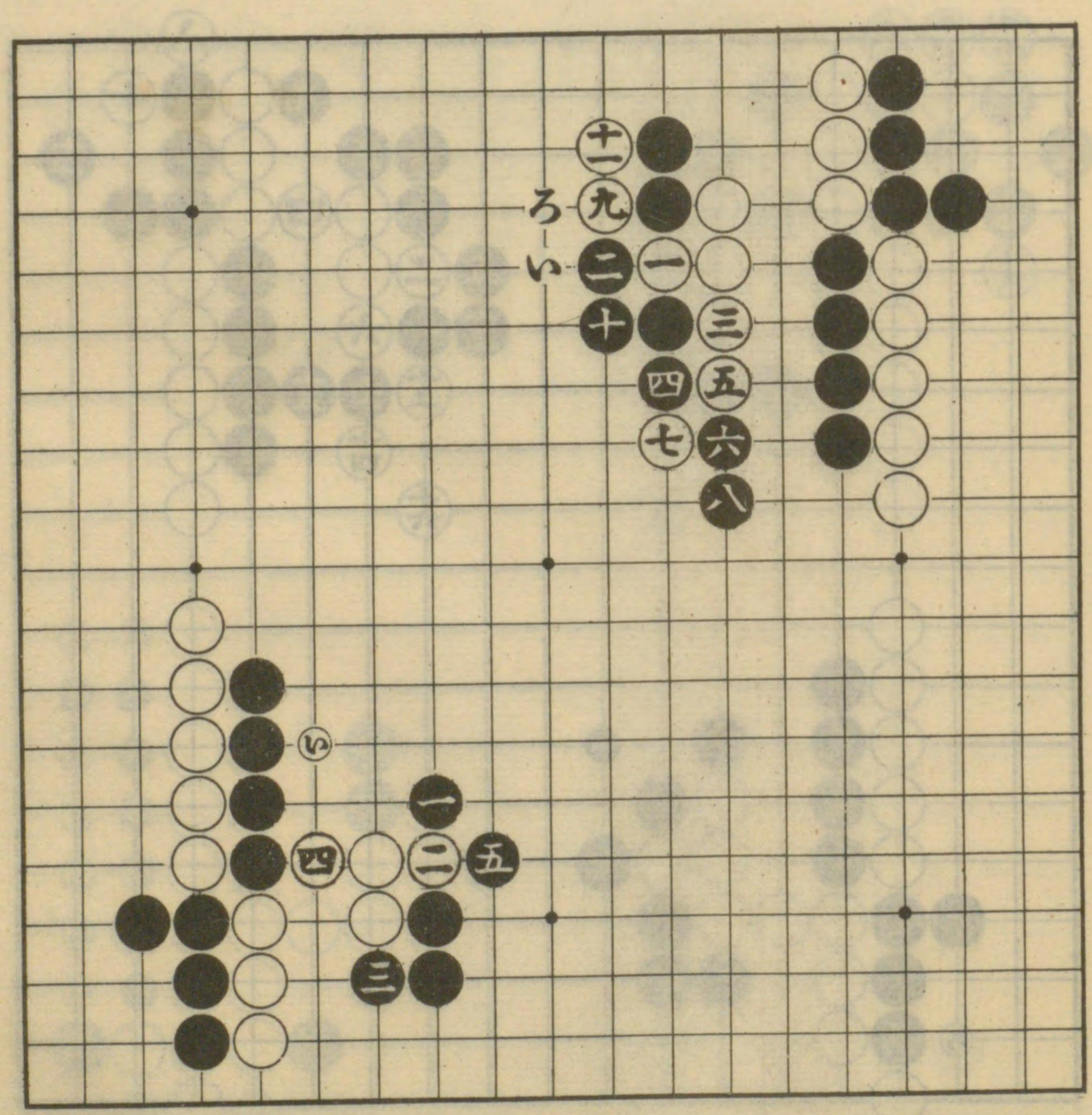
黑**十九**を**二十**に切つて絞るのは簡單に黑がいけません。且つ白は必ずしも**四**と約へず第百二十圖の歸結もありました。この故に黑**三**にて**四**の曲りを先にする事が考へられる。卽ち次圖下隅。



（**第百廿五圖**）黑**四**は第百二十圖黑**十六**の手に當る變化。矢張り白**七**・**九**の切りが成立します。黑**十**を**い**に引けば白**ろ**と押す事言ふまでもない。

下隅は白**二**と出た時に**三**と曲るので卽ち第百二十圖黑**十四**の手に相當する。

白**四**の正法は次圖以降に示しますが若し斯く**四**と突當れば黑**五**と約へられて第百廿一圖上隅で指摘した征問題は固より白**い**と飛頂ける凌ぎさへ失はれる。第百二十圖黑**十四**は此**三**を先にすべき事に訂正されるのを知る。

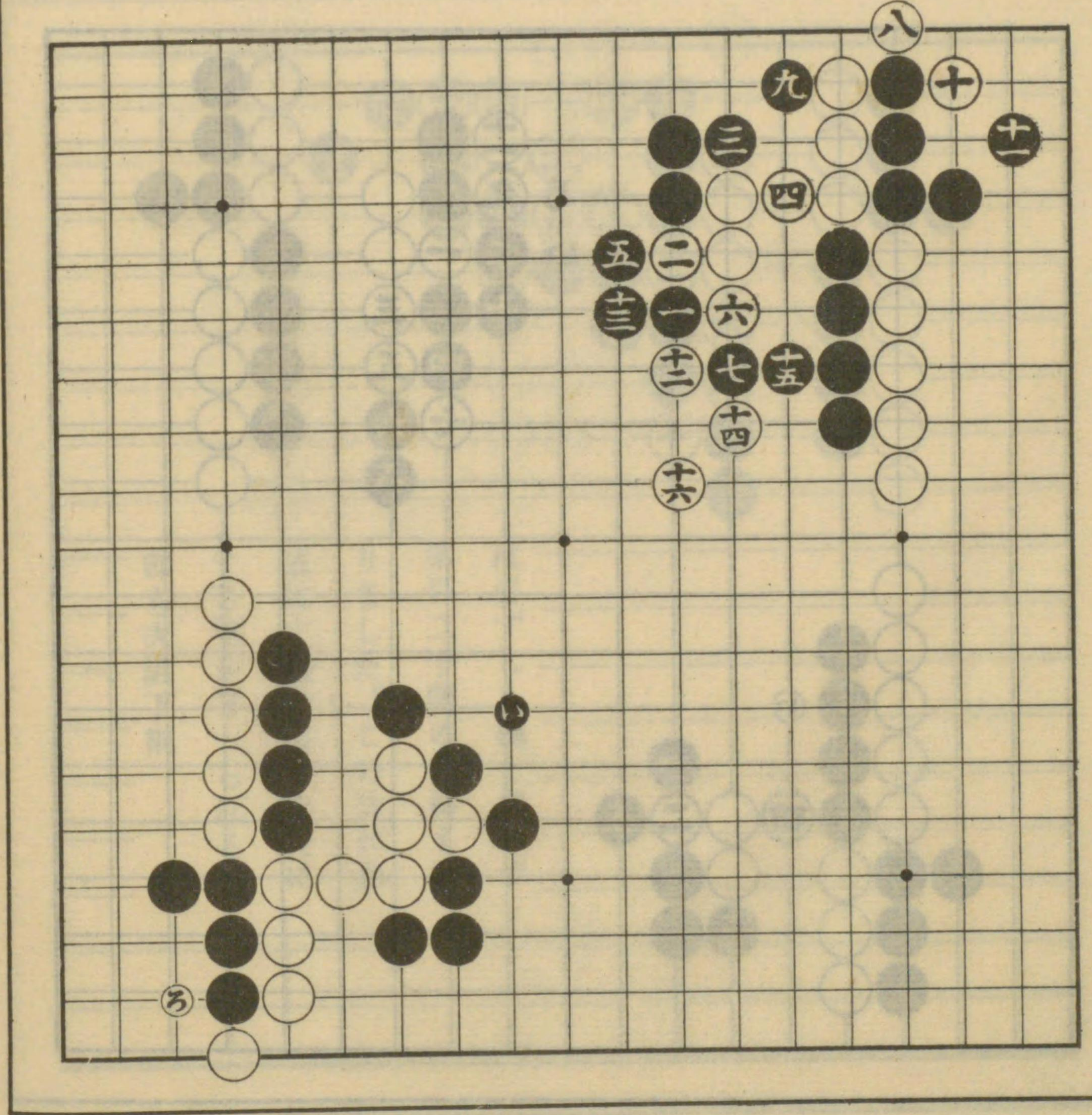


（第百廿六圖）白四と愚形なれども粘がざるを得ません。

黒七は第百三十圖に示す變化と共にこの白を取掛けに行く意味です。然らざる場合は自ら別問題である。

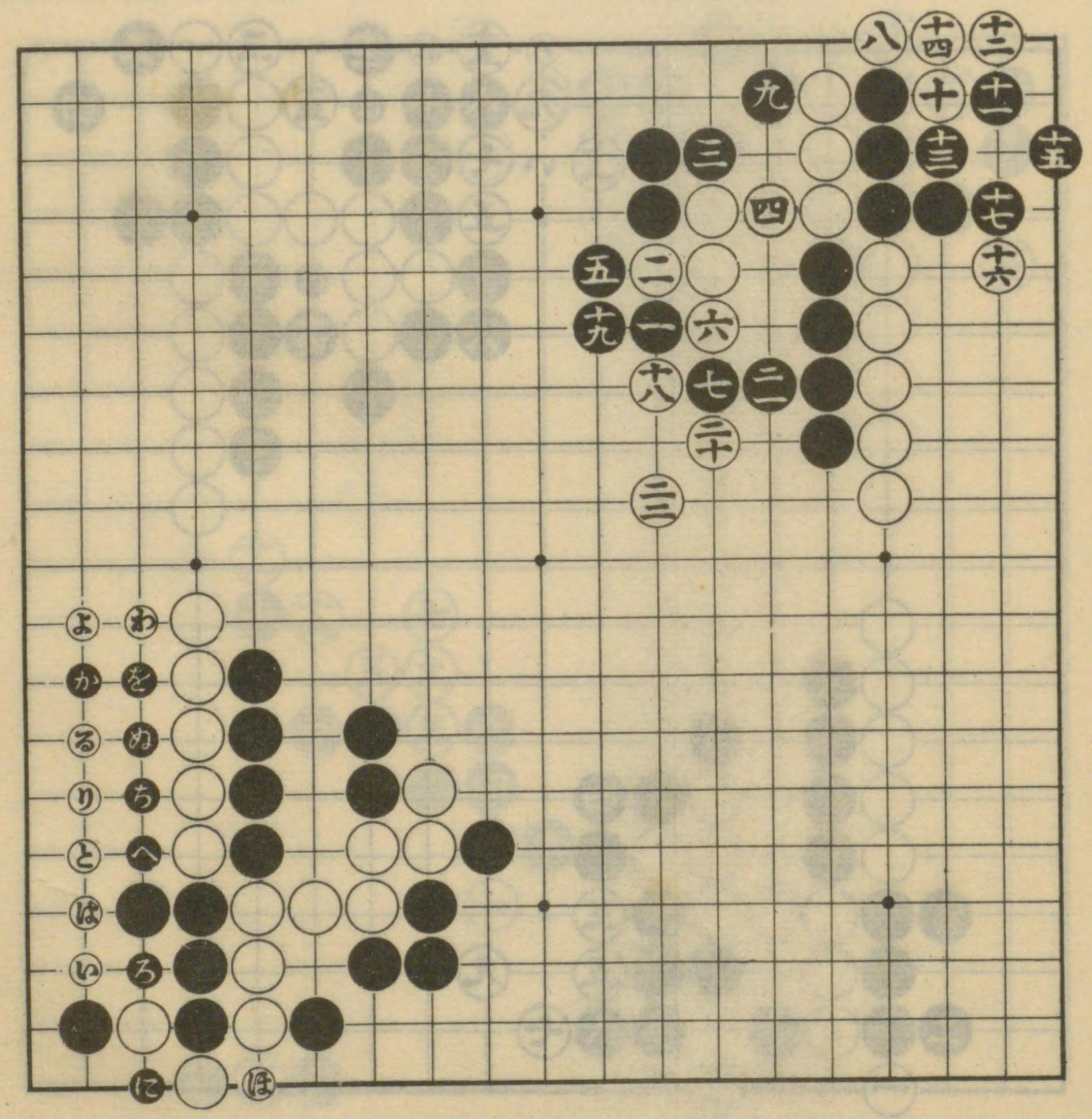
白八にて十二の切を先にし黒十三白十四以下と運べば直ちに第百二十圖に歸著します。なほ八の變化は第百廿九圖にも。

黒九を下隅(い)では白(ろ)にて攻合の足りぬ所から斯く九と尖頂けたのですが、白十六迄となつて隅の問題でなく中央の黒が取られて終ひました。なほ次々に。



（第百廿七圖）黒十一と夾頂けて見ます。白十二では下隅(い)以下に依れば最も簡單ですが、斯く十二・十四と平易に應じても宜しい。白二二まで、中央との持は直ちに黒の全滅に外なりません。黒三の曲りを先にするのが正しい手順であるとしながら此失敗は何が故であるか。黒九の尖頂けが悪いのです。即ち次圖黒二以下に從ふ。

下隅白(い)と綰出し順次符號の示す通りに白(よ)までとなつて黒に生還の途なきは痛快です。黒(に)以下は勿論參考迄にすぎない。

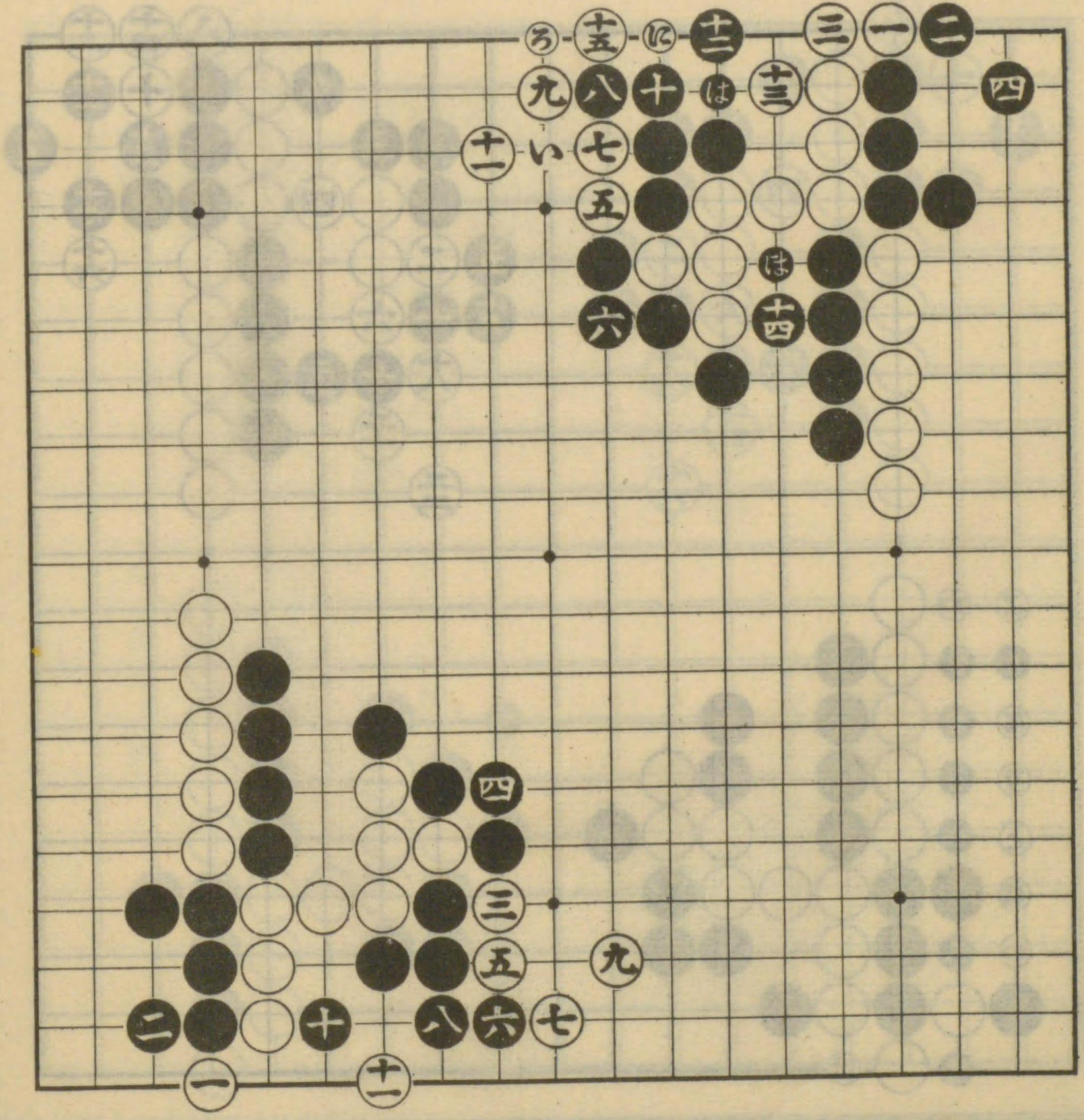


（第百廿八圖）白一に對しては黒二と約へるの一手です。なほ左下隅參照。

白十一を堅くいに粘ぐべきか否かは左上隅方面の條件もあり得失を言ひ得ません。

黒十二を十三ならば白十二と置いて黒敗。十五までの持は早晩白ろにに依て黒ははと詰めざるを得ない、この虚路詰りの形が誠に厭味なのです。

下隅黒二と弛めて白九に次ぎ黒十は白十一と置かれます。十を十一に、白十となる持は隅の治まらぬ所が上隅より黒不利。

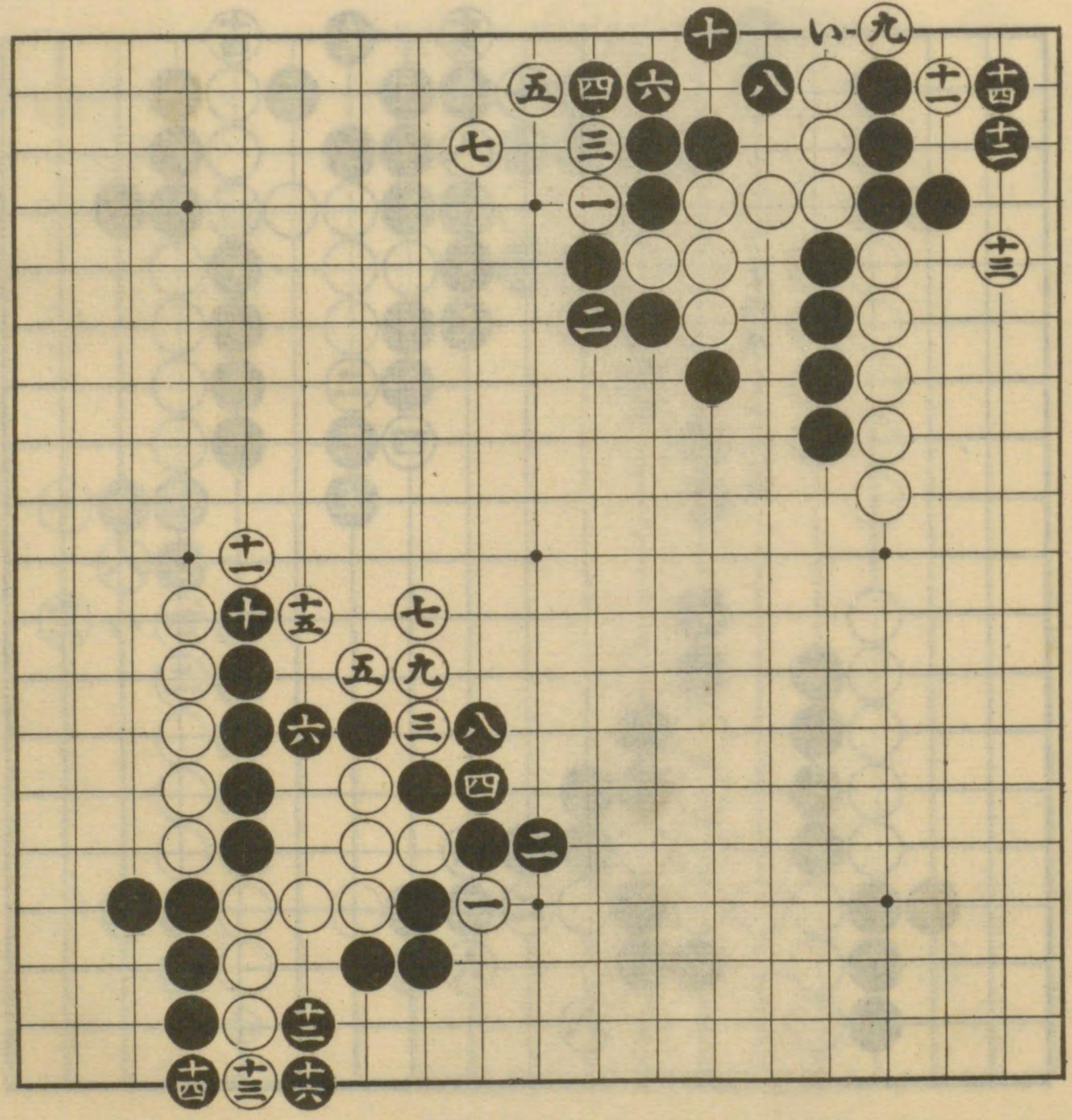


（第百廿九圖）白が一以下を先にして九と綽ねる事の不當を示す。前圖との差です。

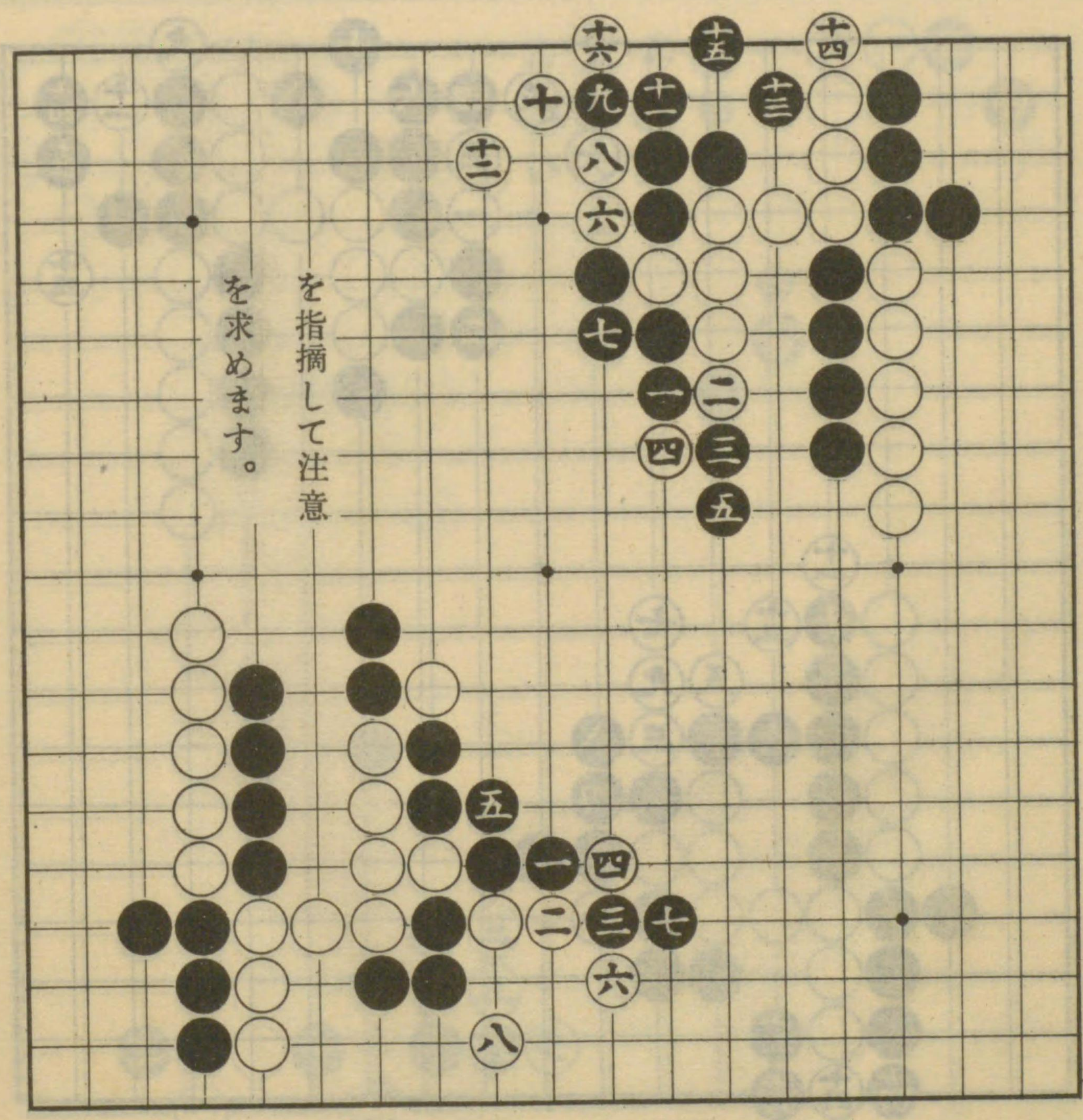
今度は黒八が成立する。白九をいに下るも黒十と眼を持つて攻合に勝ちます。

黒十二と尖んで良いのは黒八が加はつてゐるからに外ならぬ。第百廿六圖上隅と對照します。白十三を十四ならば黒いと打込んでの追落しで簡單です。

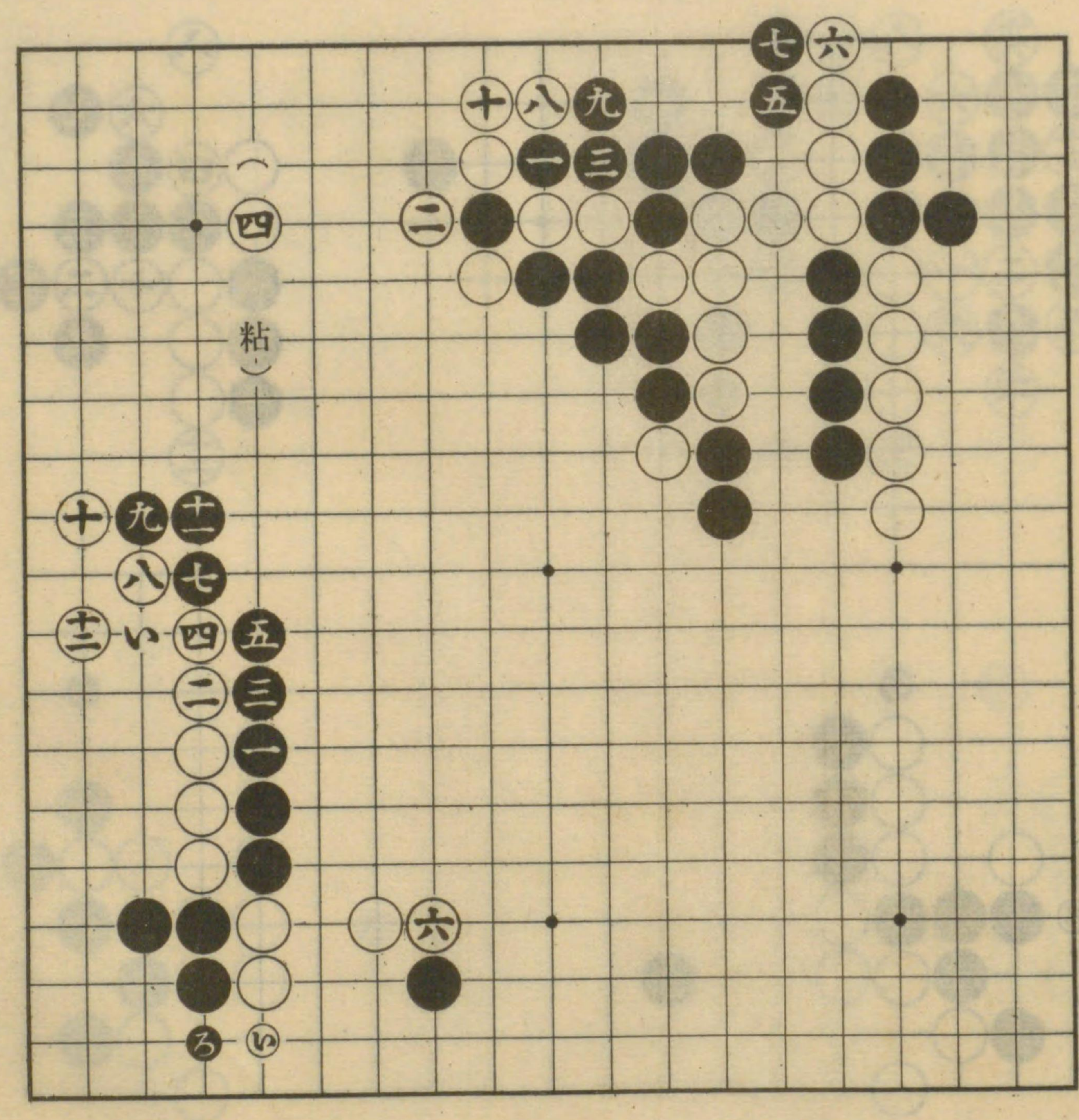
下隅黒二と引くのは十六まで黒後手持は第百二十圖に等しけれど同圖に比して白一黒二の交換が黒不利。味が非常に惡い。



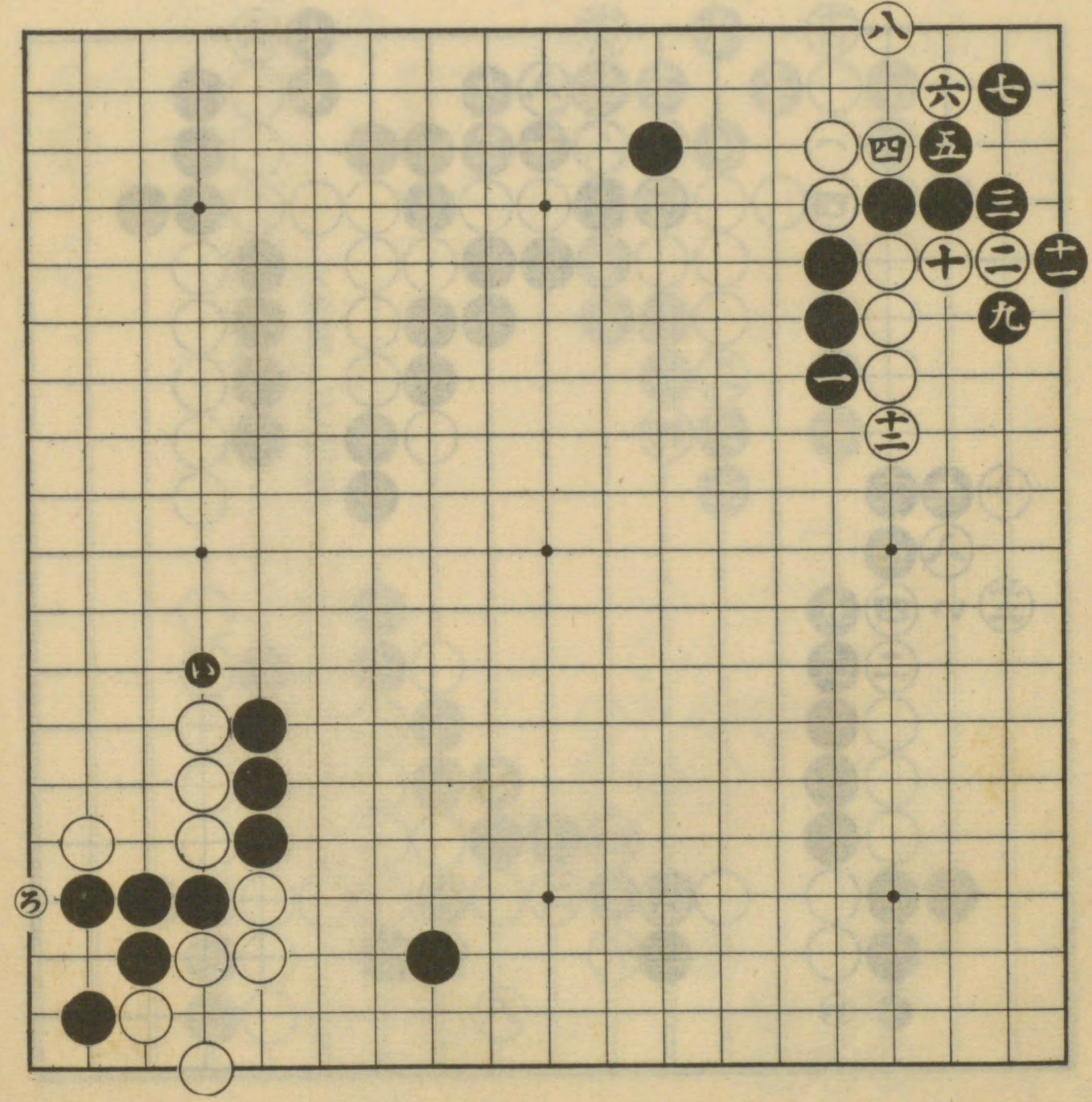
（第百三十圖）第百廿六圖黒七を斬く一と弛める變化。白四以下は第百廿三圖以降に類似しますが、白十四・十六にて黒が一手敗となるのは前圖上隅との差。黒一と弛んだからです下隅は黒一と引いて見ました。白八までにて明瞭です。黒七の變化は次圖に示しますが結局上隅黒一は成功しない事を知ります。黒としての最善は第百廿八圖なれど固よりそれも絶對の事ではなかつた。最後に第百二十圖白十七にて三十の綽を先にせば第百廿六圖に歸する事を指摘して注意を求めます。



（第百卅一圖）黒一・三と絞つても白八・十と綽粘がれて攻合は黒敗なる事を確められたい。下隅は第百十九圖黒六にて直ちに三・五と押す變化。白六は絶對ではありませんが斯く押す事も出來るので、黒七・九の二段綽は敢て恐れない。黒十一にていに切り二以下五子を取る餘裕がないのです。白四で六に押し黒四白い黒八の二段綽とはそこに大差があります。白十二の後に隅には劫が殘る。第百十九圖黒二に關する變化は以上にて略盡しました。



（第百卅二圖）黒**一**と押す型。出切りの最も普通なるものです。白**四**と密接して曲るのが肝要。**四**を**六**に斜走しては弛む事は第百卅四圖下隅以降に譲ります。黒**五**も斯く接して約へるのでなければなりません。**五**を**六**に飛ぶの不利は第百卅七圖に。白**八**と掛粘いで一眼を保つ所も大切です。黒**九**・**十一**は手數を延ばす所以。その代り白**十二**とこの要點に行びる事を得ました黒**九**にて下隅㋑は白㋺と綽られて黒に手段がありません。猶**九**の變化は第百卅四圖上隅に。



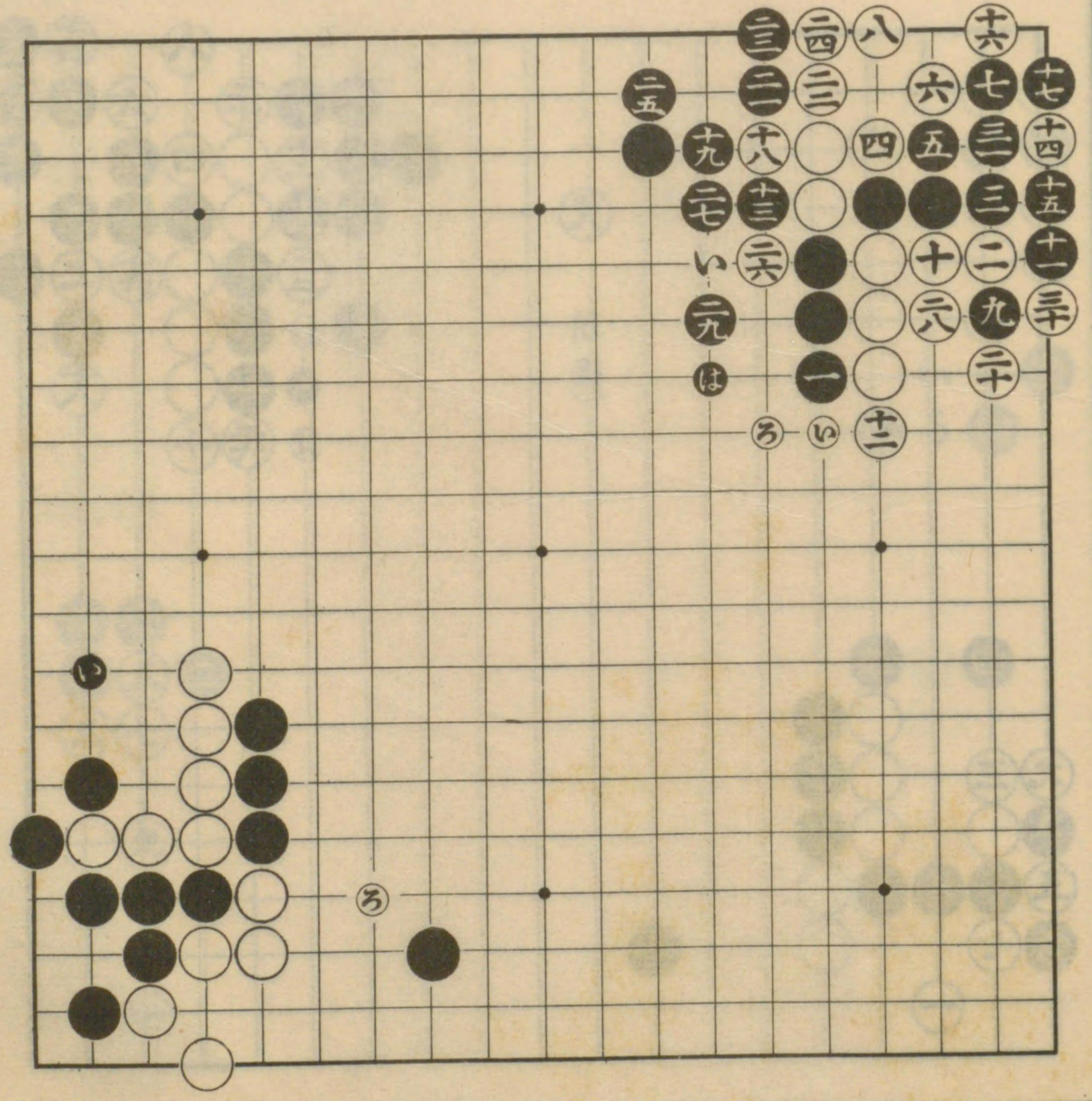
（第百卅三圖）前圖に續いて黒**十三**と約へる。**十三**を下隅㋑と飛べは白㋺と進出されて黒の不利疑ひない。**十三**は絶對です。

白**十四**・**十六**は手順。

白**二六**を單に**二八**と當て黒**い**と掛粘がれるよりも**二六**と切りを入れて黒**二七**・**二九**となつてゐる方が働いてゐます。

白**二八**にて㋑に曲り黒**二九**白㋺黒㋩まで打つて終つてから**二八**は、白後手です。

黒**三一**までの持は黒が一手多い上に初めの二間夾が完全の働きを成さぬ所から白幾分有利。



（第百卅四圖）黒**九**と玆で眼を持つ變化。白**十**はこの時にも逃がせない要點です。

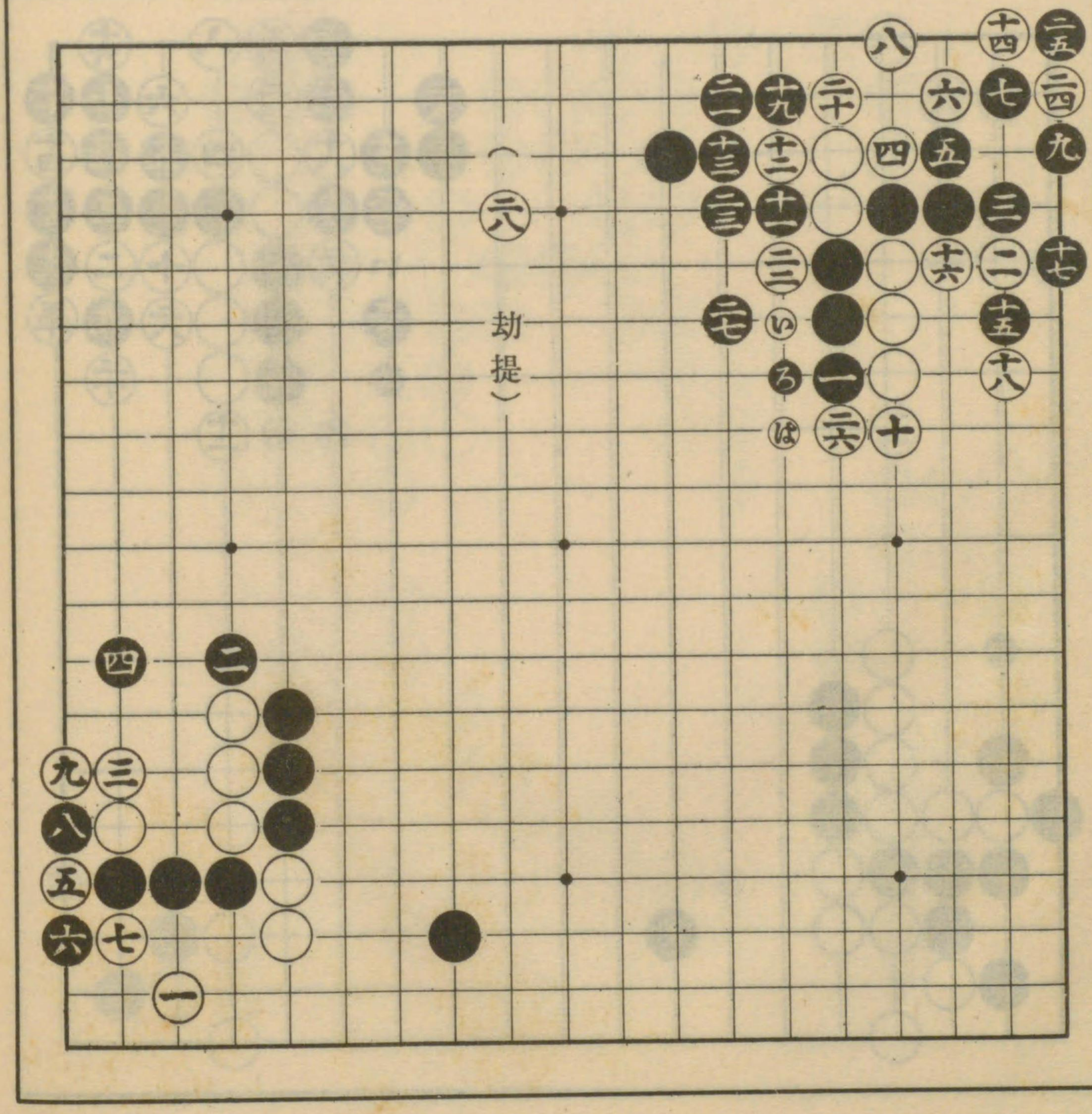
黒**十三**の時、白**十四**と綽ねて劫爭に出る手段が成立します。

白はい及びはの劫立さへ有するのでこの劫爭に勝つ。結局黒としては前圖上隅の後手持が最善なのです。

下隅は白**一**と弛んではならぬ事を示すのですが黒**二**は寧ろ拙策です。白**三**の竝びが有力。

白**九**までの劫爭となります。

白**五**を**七**に尖頂けると黒**五**と下つて白敗。なほ變化は順次。



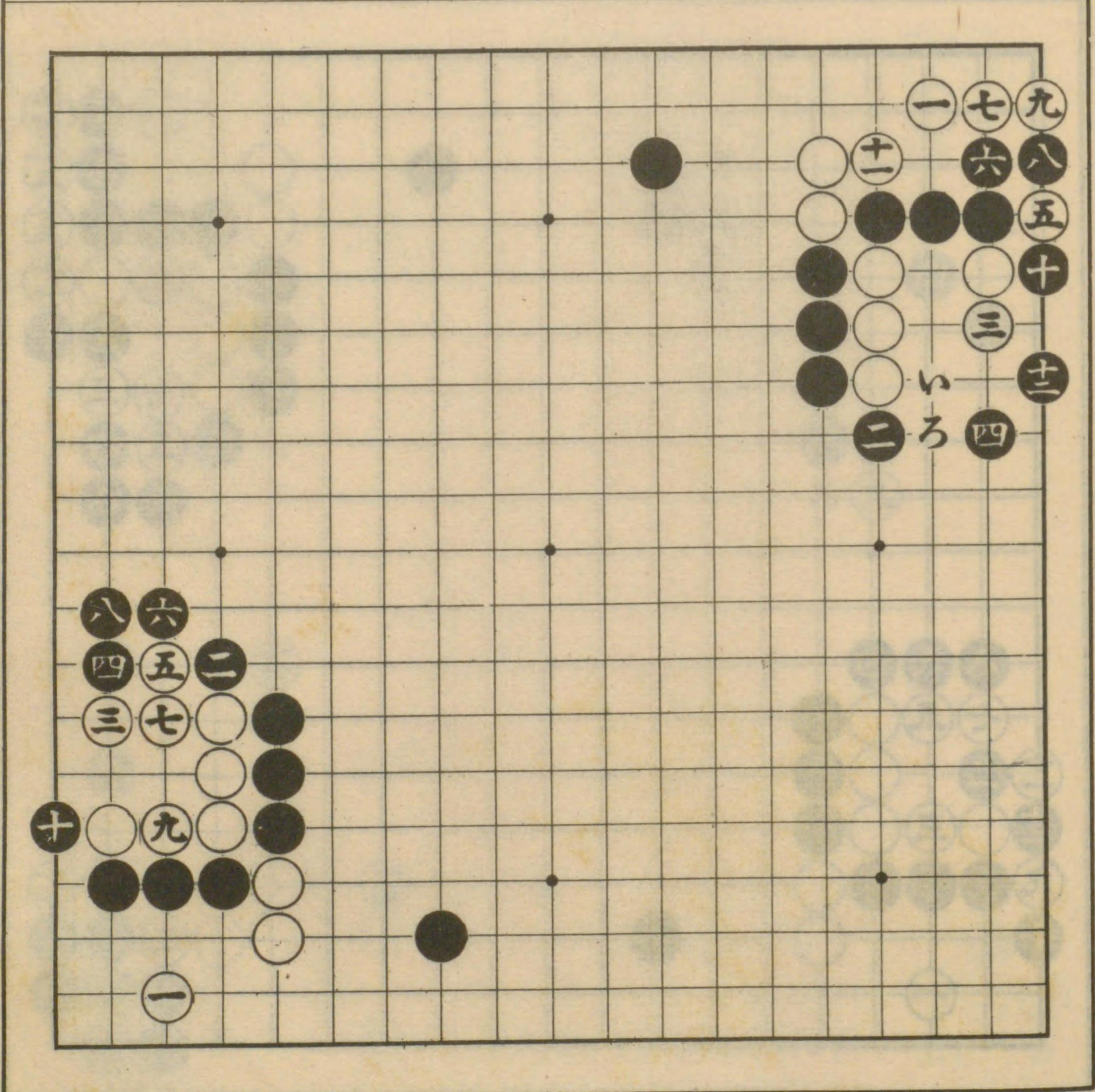
（第百卅五圖）黒**六**と曲つて白**七**黒**八**と約へる。これも矢張り劫爭ですが、黒の方が提られる劫だから、前圖下隅よりも黒は歩が悪い譯です。

黒**四**にて**い**に綽ねれば白**四**と飛ばれるし**四**を**ろ**に下るのも攻合の關係には變りがありません。

但し白**三**の竝びが肝要であつてこれに就ては左下隅參照。

下隅白**三**と飛ぶと、黒**四**以下**十**迄にて攻合白敗となる。

黒**十**に關する注意は次に述べますが白の失敗は**三**の飛びであつて黒**二**が有力なる譯ではない。

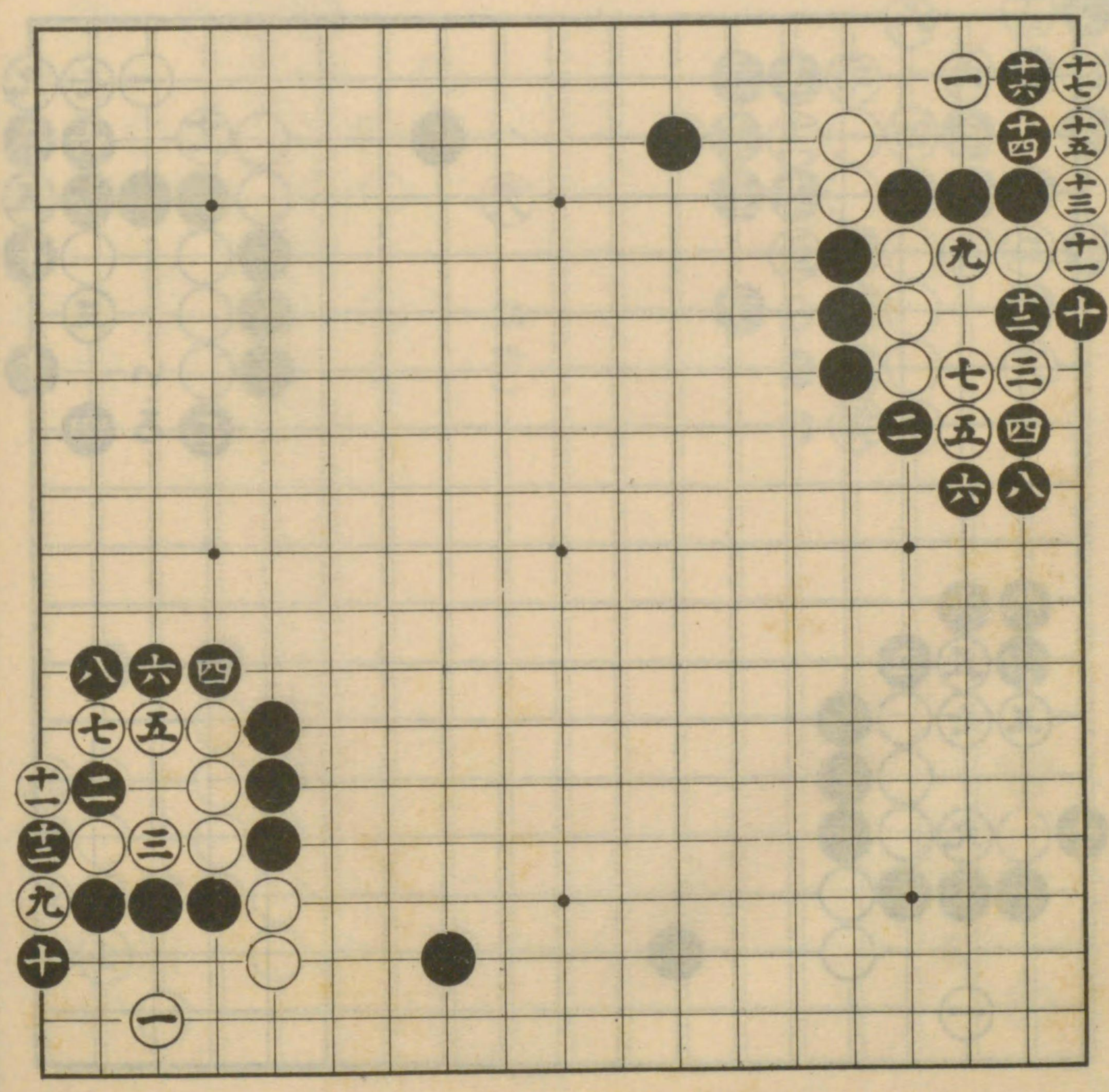


（**第百卅六圖**）前圖下隅黒**十**にて誤つて本圖**十**と置くと、白**十七**迄今度は黒の取られです。下隅黒**二**と夾頂けるのが最も簡明である。

白**三**の別法は次に示しますが斯く**三**と粘げばそこで黒は**四**の要點を約へる。以下**十二**までの劫爭は明らかに黒有利です。

黒**十**にて**十一**に下ると、白**十二**と粘がれて黒の失敗に終る事は上隅に等しい。

前々圖下隅の劫爭では寧ろ問題ですがこの劫爭ならば白の提られる劫だから黒がいゝのです。

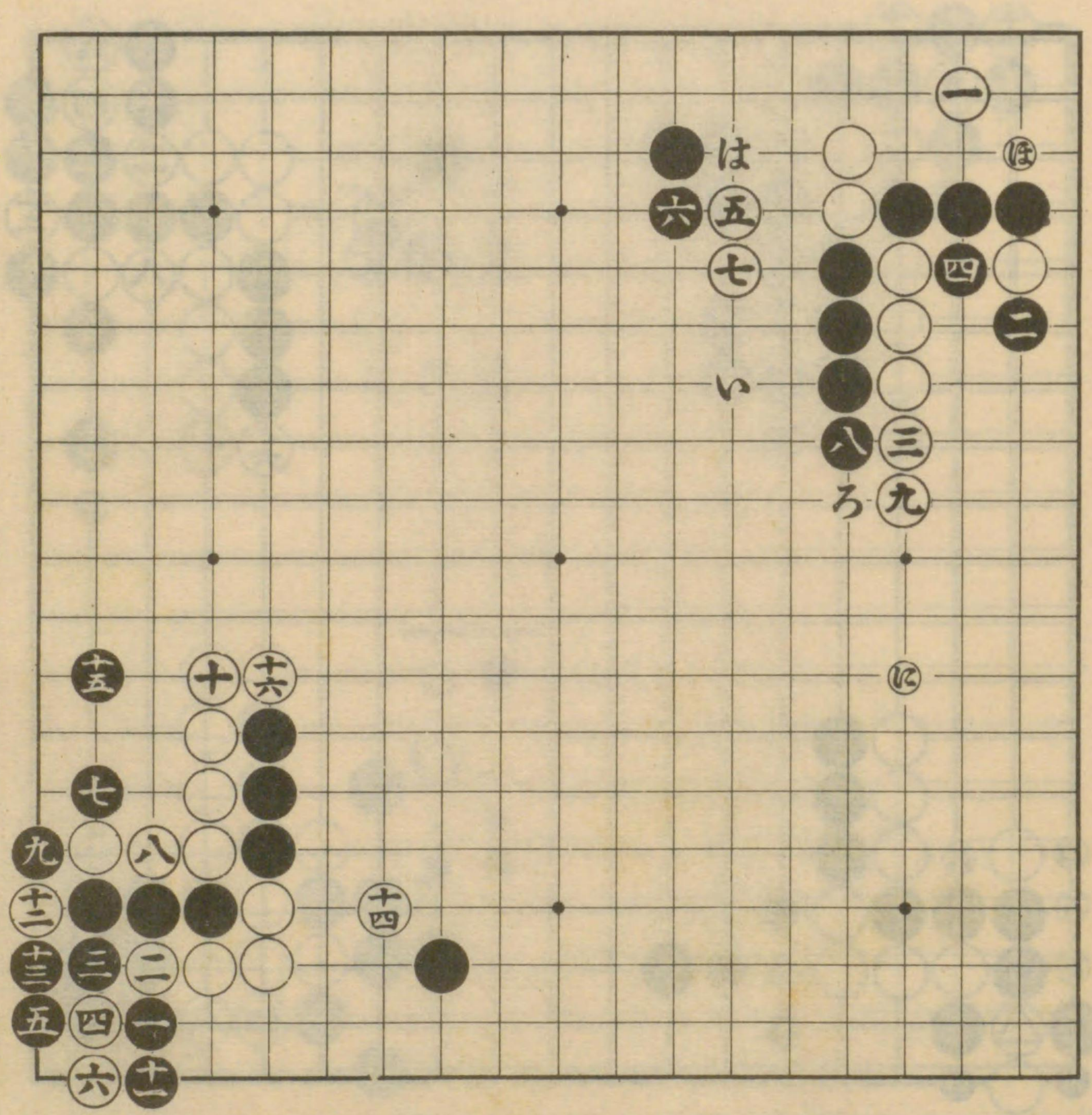


（**第百卅七圖**）白**三**と行びなければならぬ事を前圖下隅に依つて知ります。

黒**四**より白**九**までは必然。**九**に次いで黒は**い**・**ろ**・**は**等の中を選ぶのですが明示は不可能ですなほ㊁方面に白の勢力が加はると隅は白㋭と尖頂けられてその儘黒死なる事に注意します。白**一**弛めりと雖も出切りが元來黒に於て幾分無理なのですから絶對には白に不利なる筈はない。

下隅は第百卅二圖黒**五**にて**一**と飛ぶの不當を示すのです。

白**二**・**四**は常用の手筋。猶次に

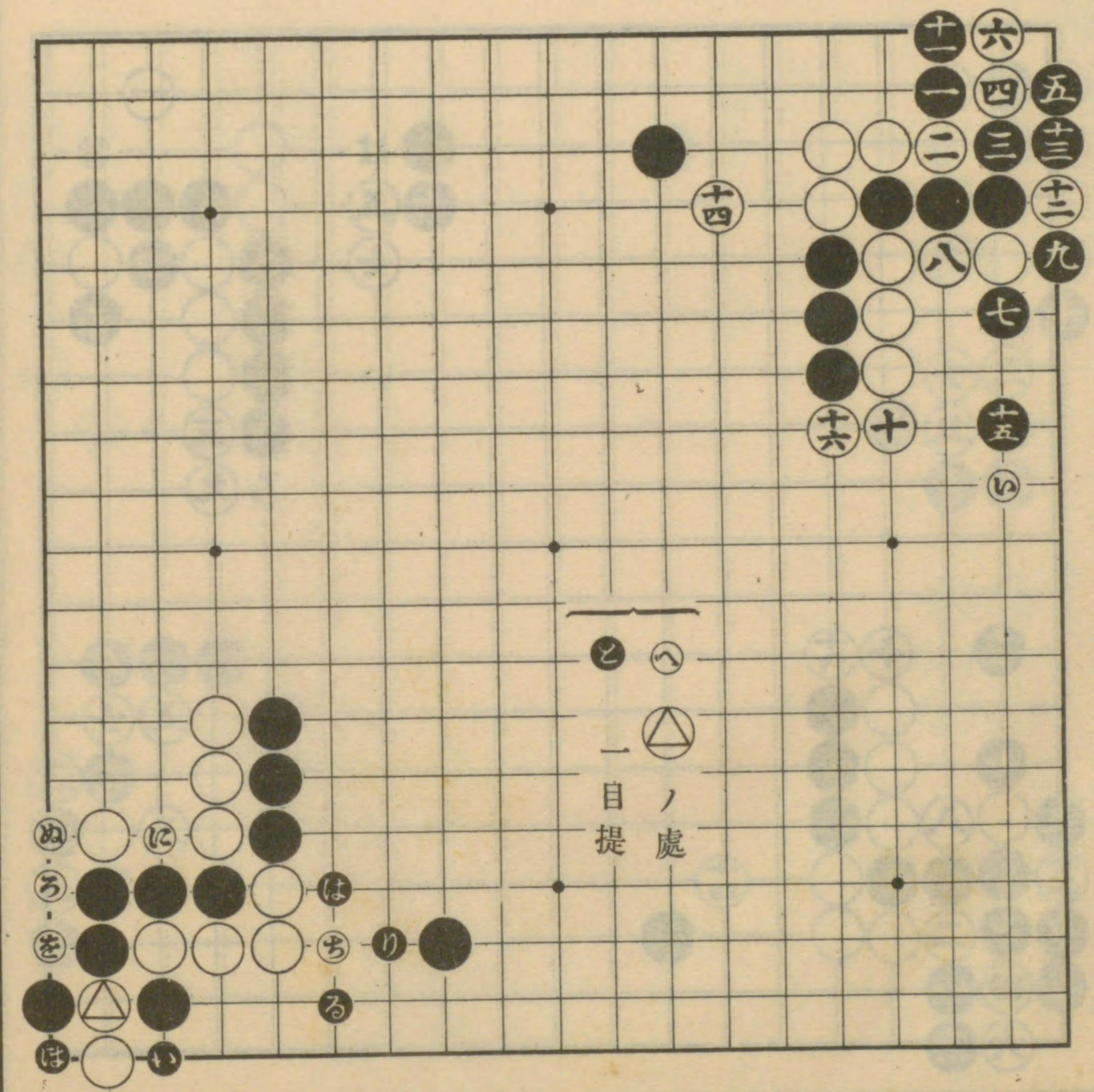


（**第百卅八圖**）黒**五**にて**六**より當てれば白**六**と下る事は言ふまでもありません。

黒**七**にて**十一**に約へる事が出來ない理由は下隅に明らかです。

白**十六**までとなれば黒は纔に**十五**と逸出したに留まり、一方の三子は全然浮動してゐます。然も**十五**の處も他日白より(い)と頂けられる手段があつて完全なる活形を得てはゐない。黒**一**の非理は以上に依て疑ひなしです。

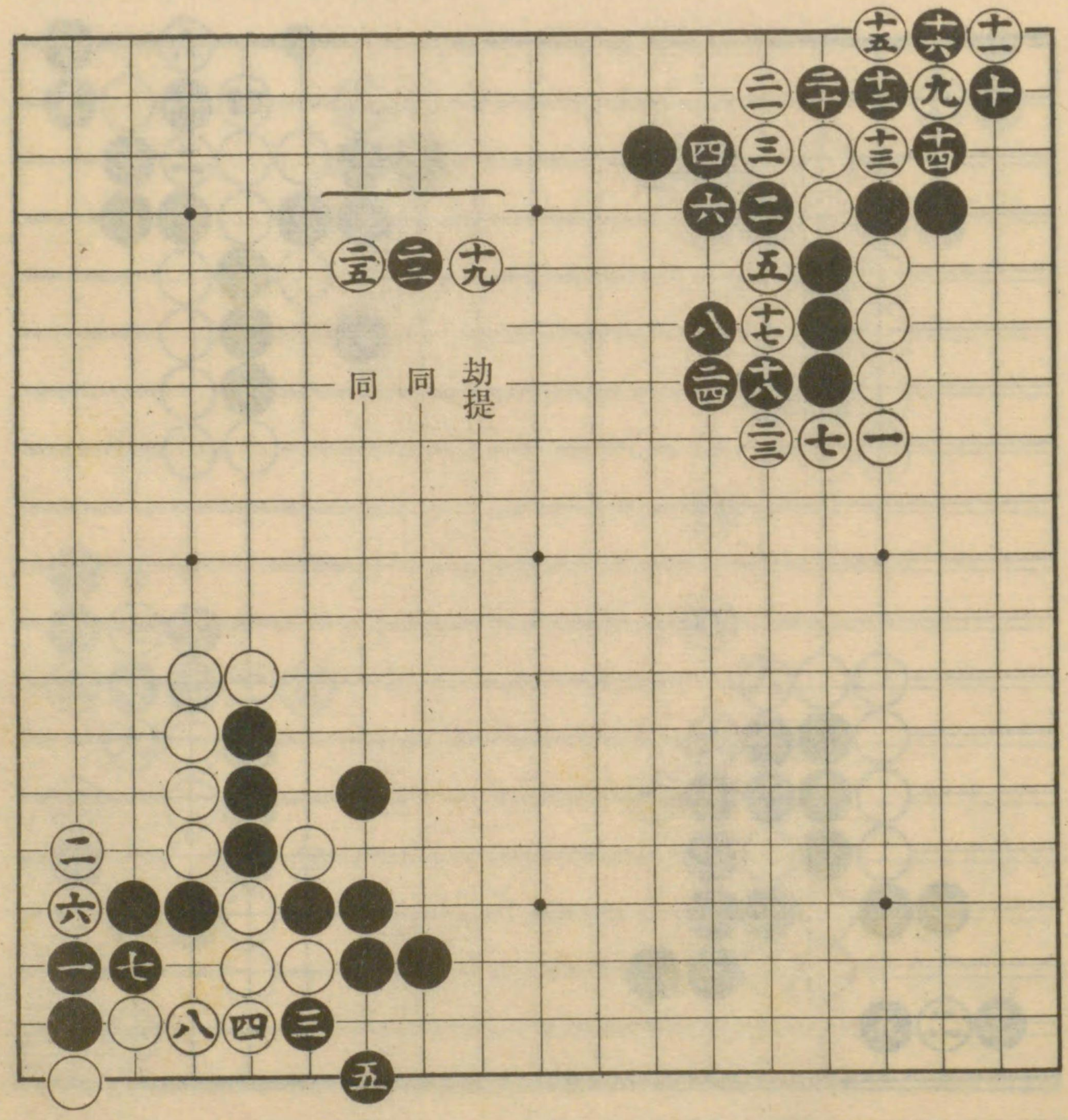
下隅黒(い)は白(ろ)以下符號の順に運ばれ四子を取られる事になるからこれ亦問題になりません。



（**第百卅九圖**）白**一**と行びた時に黒**二**を**十三**に約へ白**六**と飛べば既述第百十九圖以降に戻る譯ですが斯く**二**・**四**と取掛けに行くは如何と考へて見ます。

白としては**五**・**七**を打つて右邊の厚壯を増すのみでも十分な位ですが、更に**九**・**十一**と著手して此隅が寧ろ黒に不利を齎す。

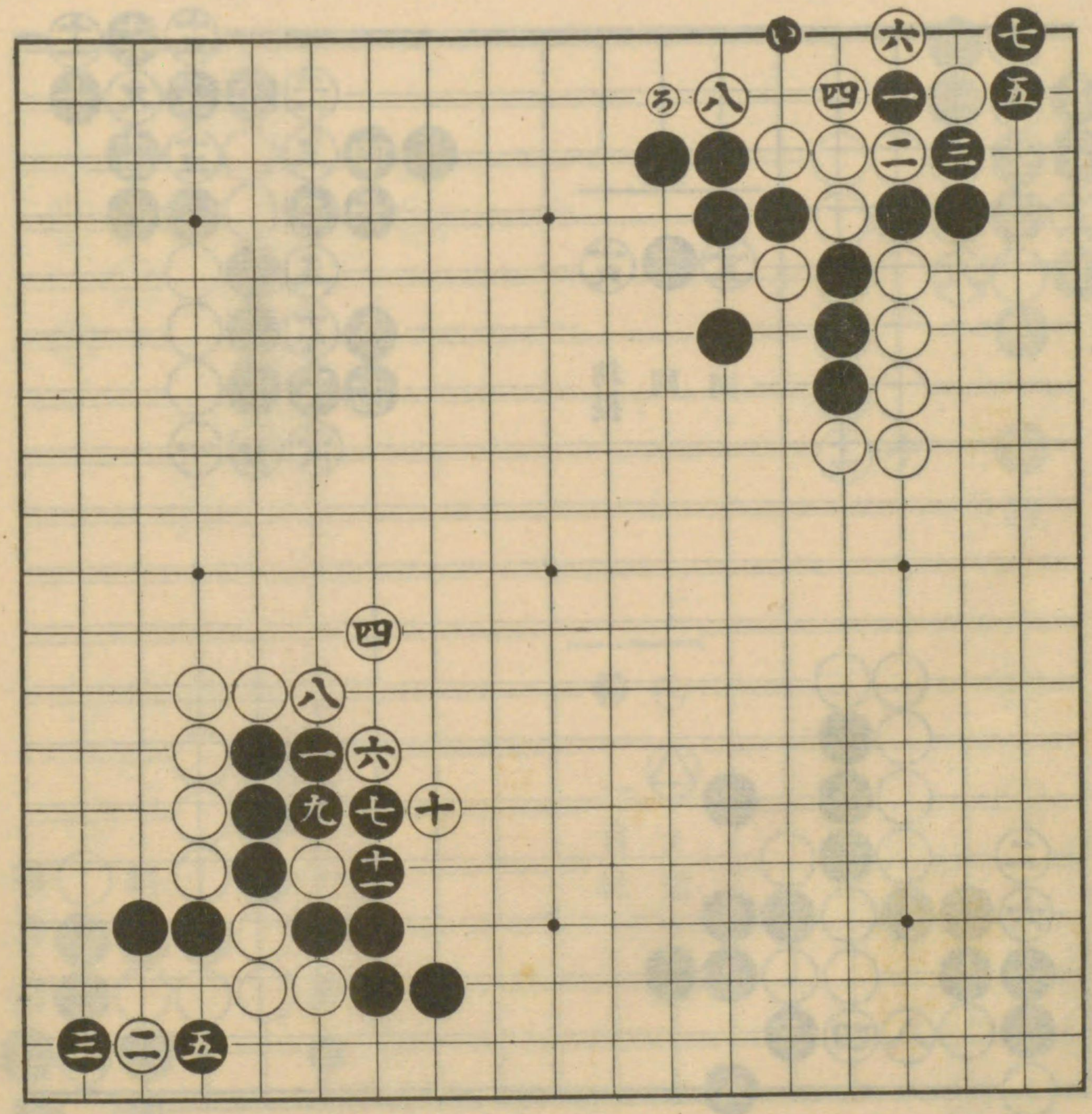
黒**八**・**十**・**十二**等の別法は次々に。白に**十七**及び**二三**の劫立があるので部分的にも黒の失敗です。黒**十二**にて下隅**一**と引いても白**八**迄兎に角問題である。現在劫ですし持位では勿論黒不宜。



（第百四十圖）黒一の頂越しを先にして三・五と打つ變化。白八に次いで黒㋑と置き白の眼形を奪はうとしても白㋺と出られて黒に打つ手がありません。

下隅は前圖上隅黒八にて一と曲る變化。一見直接の劫立を無くして有力の様ですが白二黒三に次いで白四と悠々斜走されて困る。左上隅に白の締りでもあれば勿論、無くとも四と斜走した白の位が雄大です。

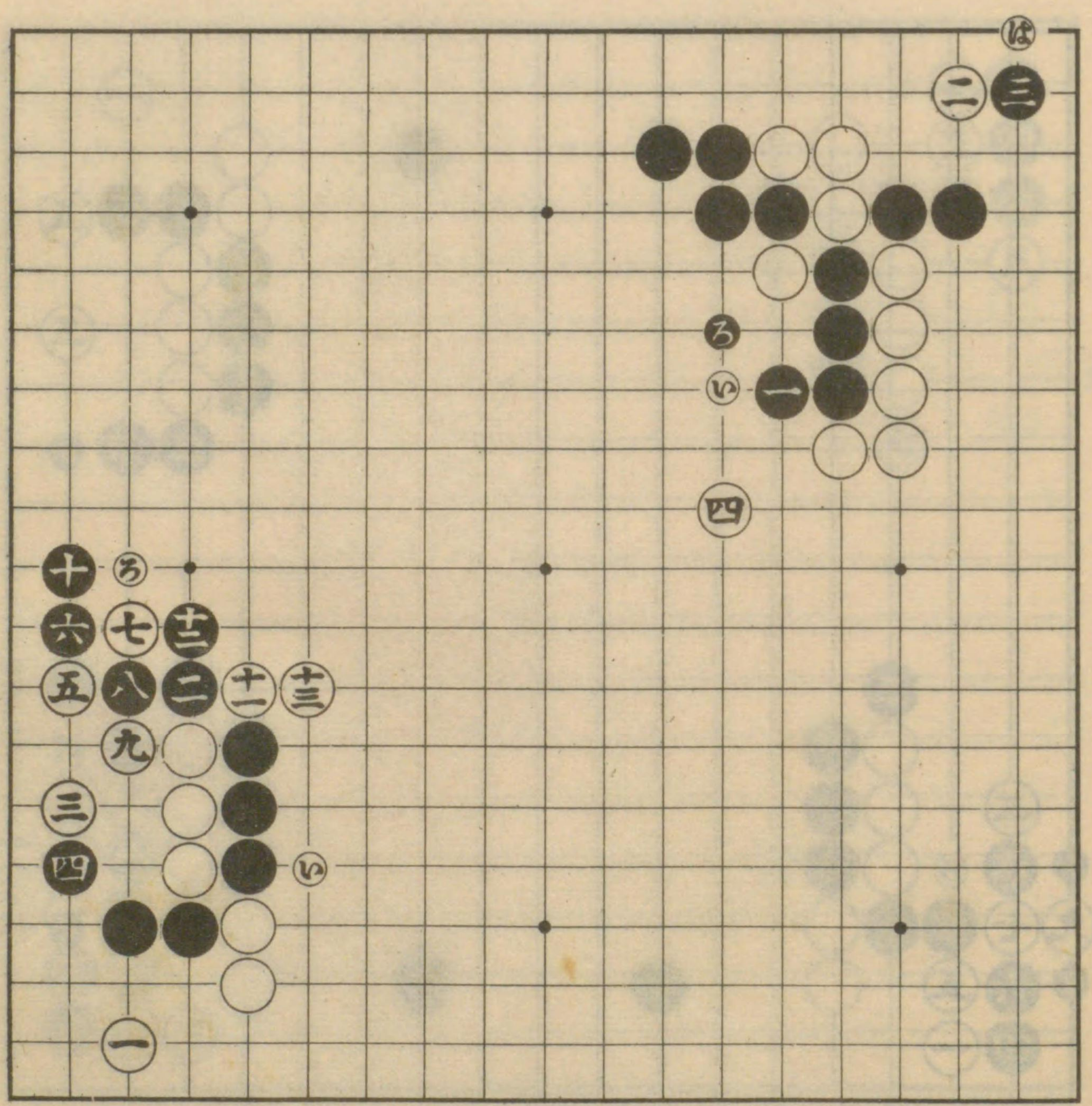
隅を取切る爲には黒五が省けず白は透かさず六以下を利かせて痛快の極みである。なほ次に。



（第百四十一圖）白四のまゝ黒が隅に手を加へる事を潔しとしないで他に轉ずれば白からは先づ㋑と頂け黒㋺と應ぜしめて㋩と綽ね、前々圖上隅の劫爭を開始する事が出來ます。㋑㋺の交換に依て玆に直接の劫立が得られるからである。

下隅は前々圖上隅白一の變化。黒二は要點の如くして實は然らず白三と飛ばれて困る。

黒四の變化は順次示しますが斯く尖頂ければ白十三に次で黒が應手に窮します。十三は又㋑も㋺もある。何れも黒が惡い。

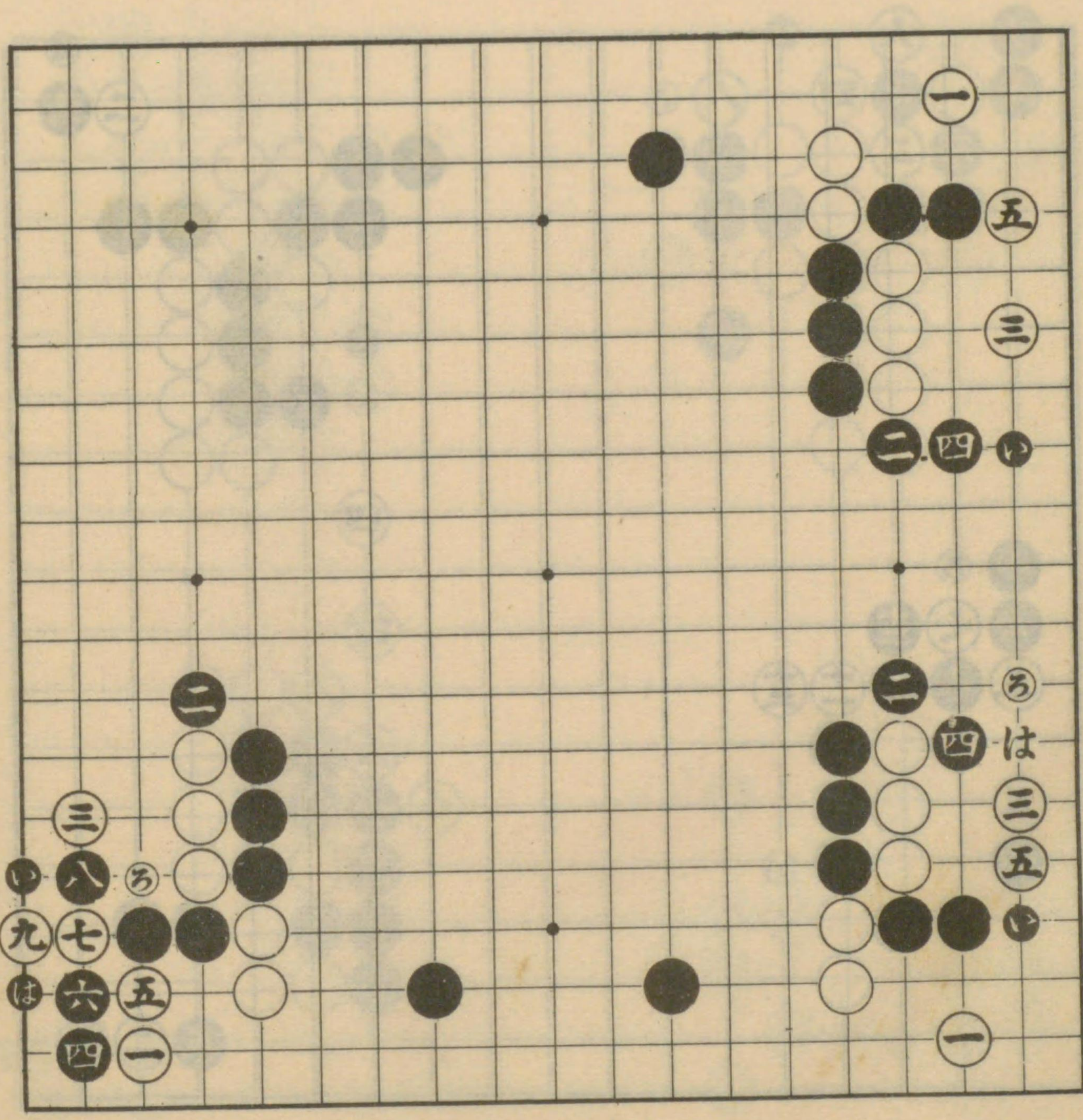


（第百四十二圖）黒四と下れば白五と飛頂けられてそれ迄です四をいに飛ぶも同然。

左下隅は黒四と頂けて見ました白五・七と切る手段があります白九に次いで黒いならば白ろ黒は白七と絞つて終ふ。黒八の手が間に合はない譯です。

右下隅黒四に對しては白五と竝ぶ。次いで黒いならば白ろと飛びます。黒ははに出る餘裕が無いから結局い以下の三子を取られる事になるのです。

以上に依て黒二の然らざるを知る。二の正法は次に。

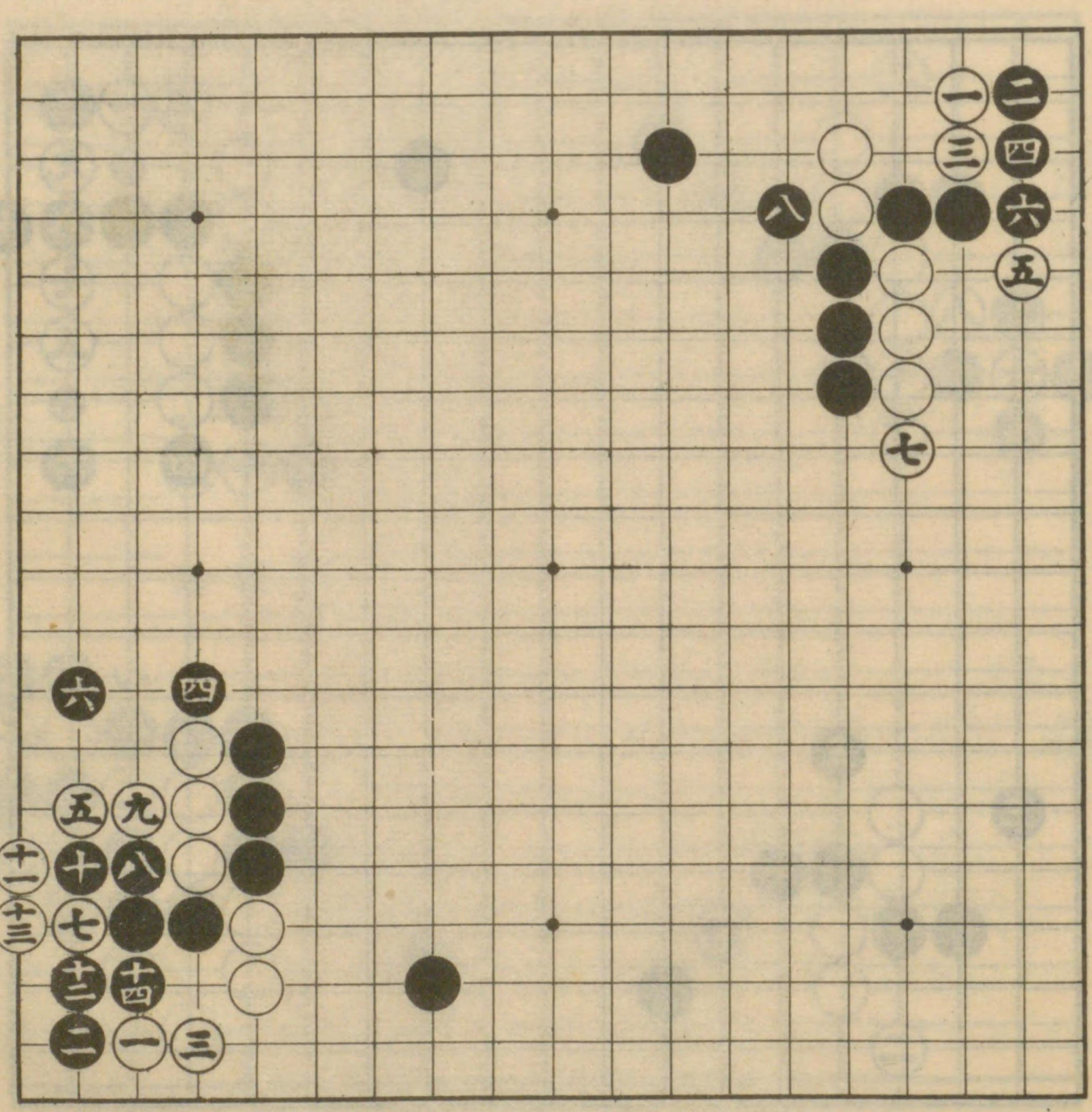


（第百四十三圖）黒二と單に頂けるのが最善です。

白三の別法は次に示しますが斯く三・五と打てば白七は絶對ですから黒八と約へられて一以下四子の死滅に外なりません。

下隅は白三と引いて見ました。黒乃ち四と綽ねます。今度はこの四が有力なのです。

白五と飛んでも黒六と封鎖し、白七の飛頂けに對しては黒八以下を打つ餘裕がある所は前圖上隅との差であります。黒二白三の交換が打つてある效果。黒八の出も肝要です。



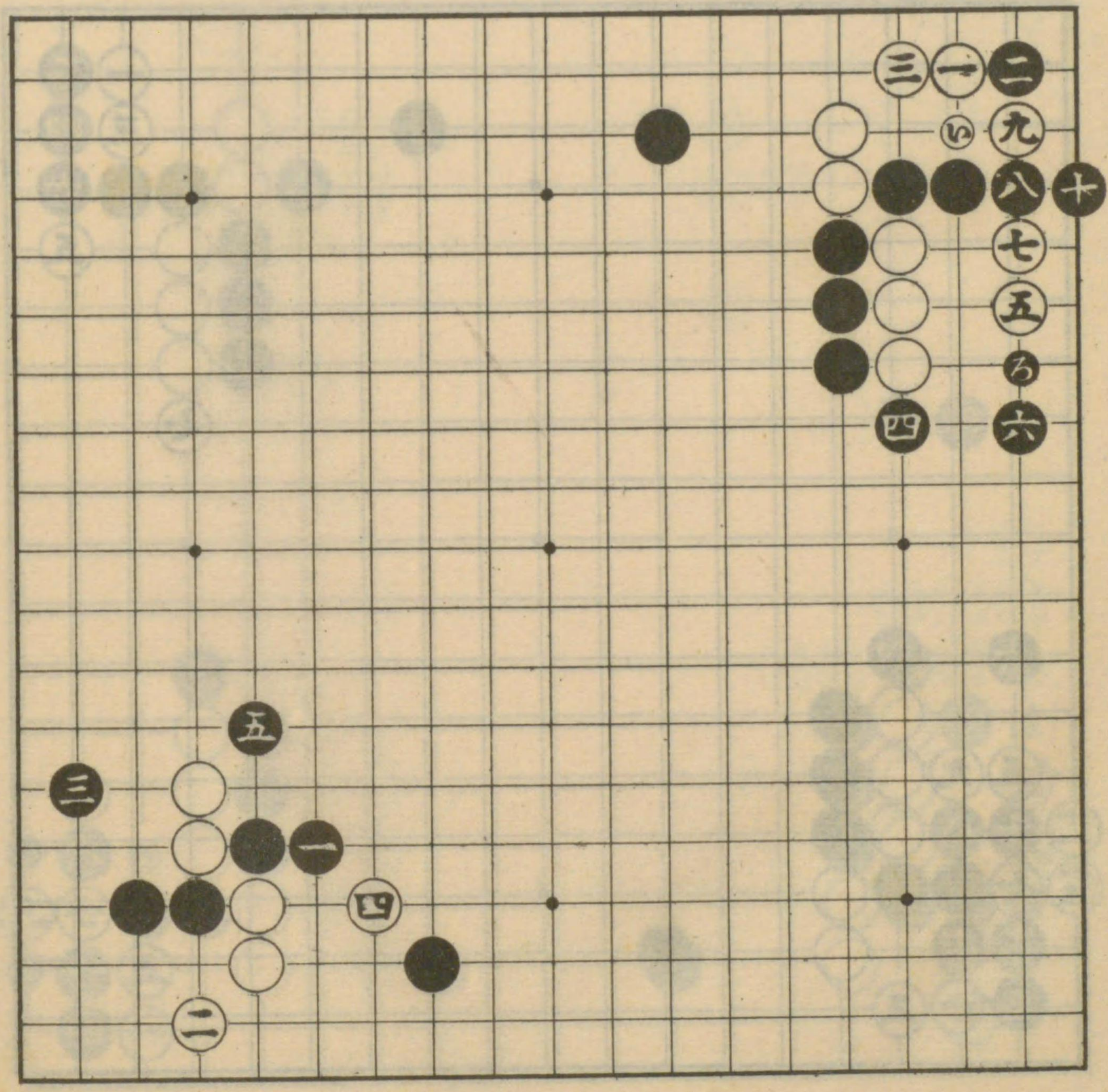
（第百四十四圖）**八**に飛頂ける手を白**七**と竝んで見ます。

黒**八**は必然として白**九**の時黒**十**と下るのが旨い。**十**に次いで白いならば黒ろで攻合は勝です。**十**にて誤つていに切ると白**十**にて攻合黒敗となる。又白**九**を**十**に綽ねれば黒**九**と繋ぐことを忘れてはなりません。

下隅は黒**一**と引く型。出切りの變化の中でもこの方は黒に無理の氣味が多い樣です。

白**二**は**四**と關聯します。この**二**があるので如何しても黒が拙い

黒**五**以降は次圖に。

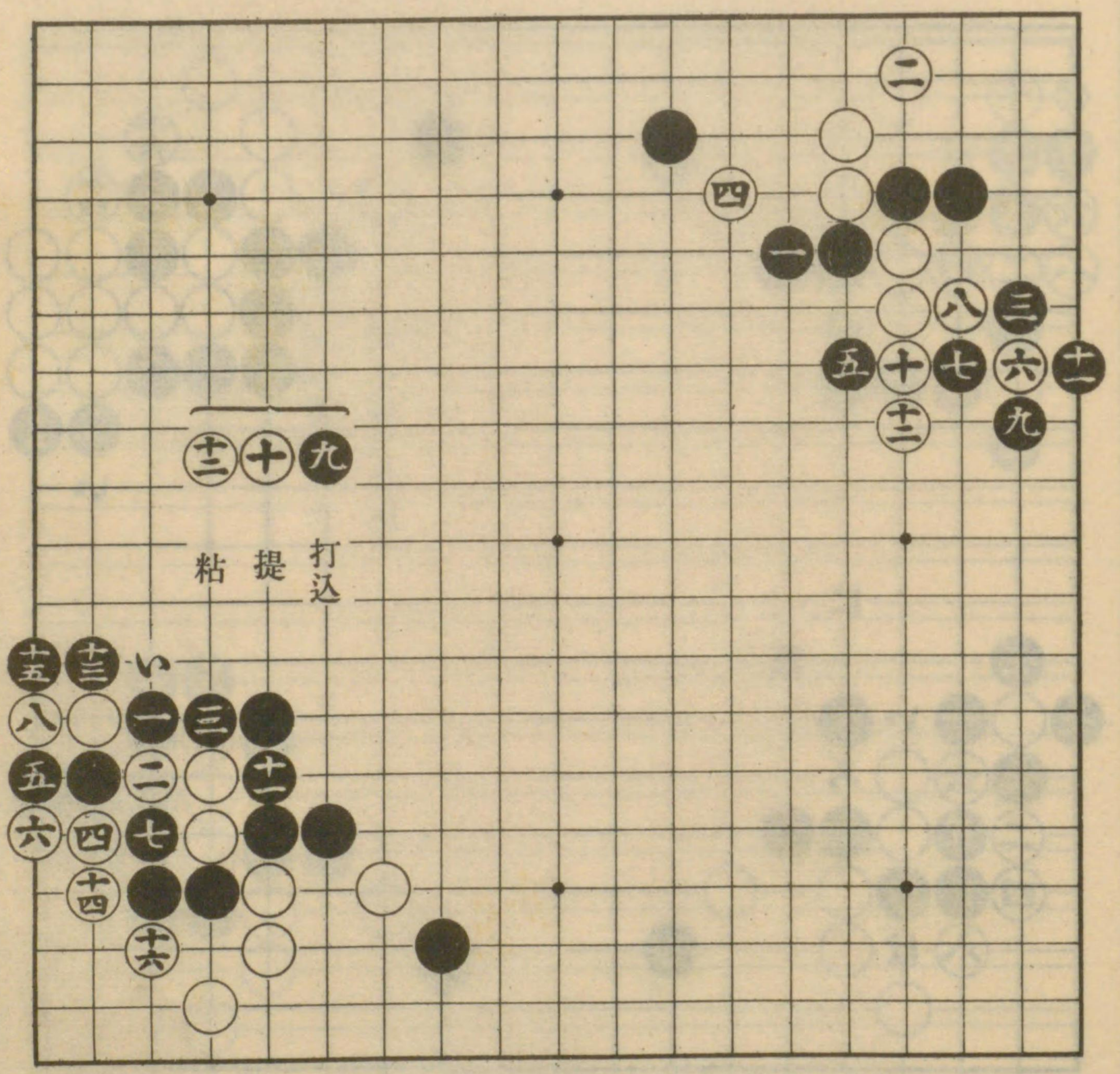


（**第百四十五圖**）黒**五**の別法は第百五十圖に示しますが勢として黒は**五**と烈しく掛けたい。

然るに白**六**と頂ける手があつてこれに黒が困るのです。

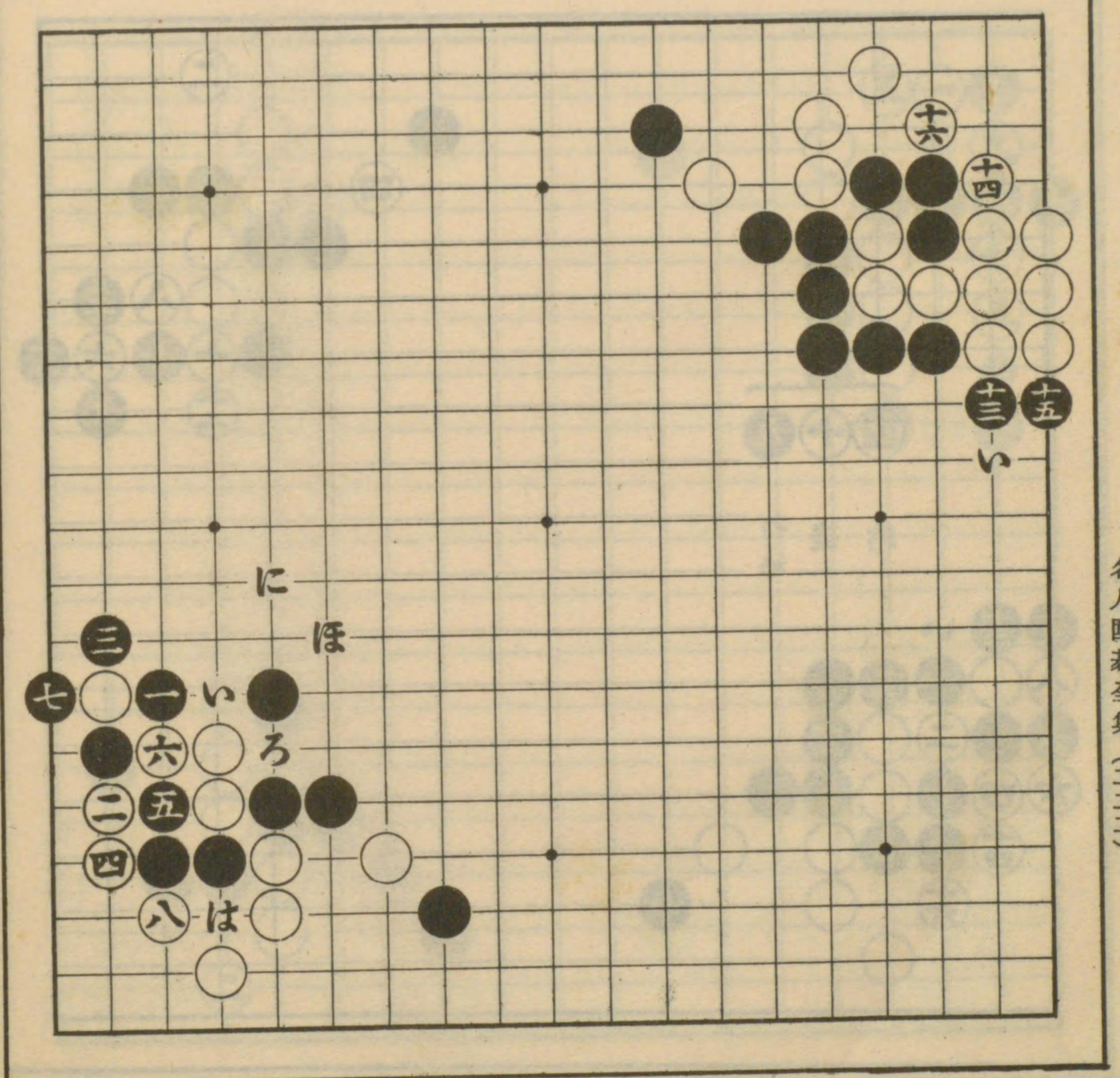
先づ黒**七**と綽出す變化から研究して見るに、この時は白**八**と切るのが愚に似て實は最善です。白**十二**の突出しとなれば問題なく、黒は極めて味の悪い形。

下隅は黒**三**と繋ぐ變化ですが白**十六**迄となつて黒のあまり形です。黒**一**にて**三**を先にし白**二**黒**一**白**四**となるも同然。**い**の欠點も厭味である。なほ次に。



（第百四十六圖）十六迄の結果に於いて殊に黒の堪へ難いのは前圖上隅黒一白四の交換ある形です。不利も太だしい。なほ黒十三にて隅より十四と約へれば白いと飛んで逸走する事は言ふまでもありません。

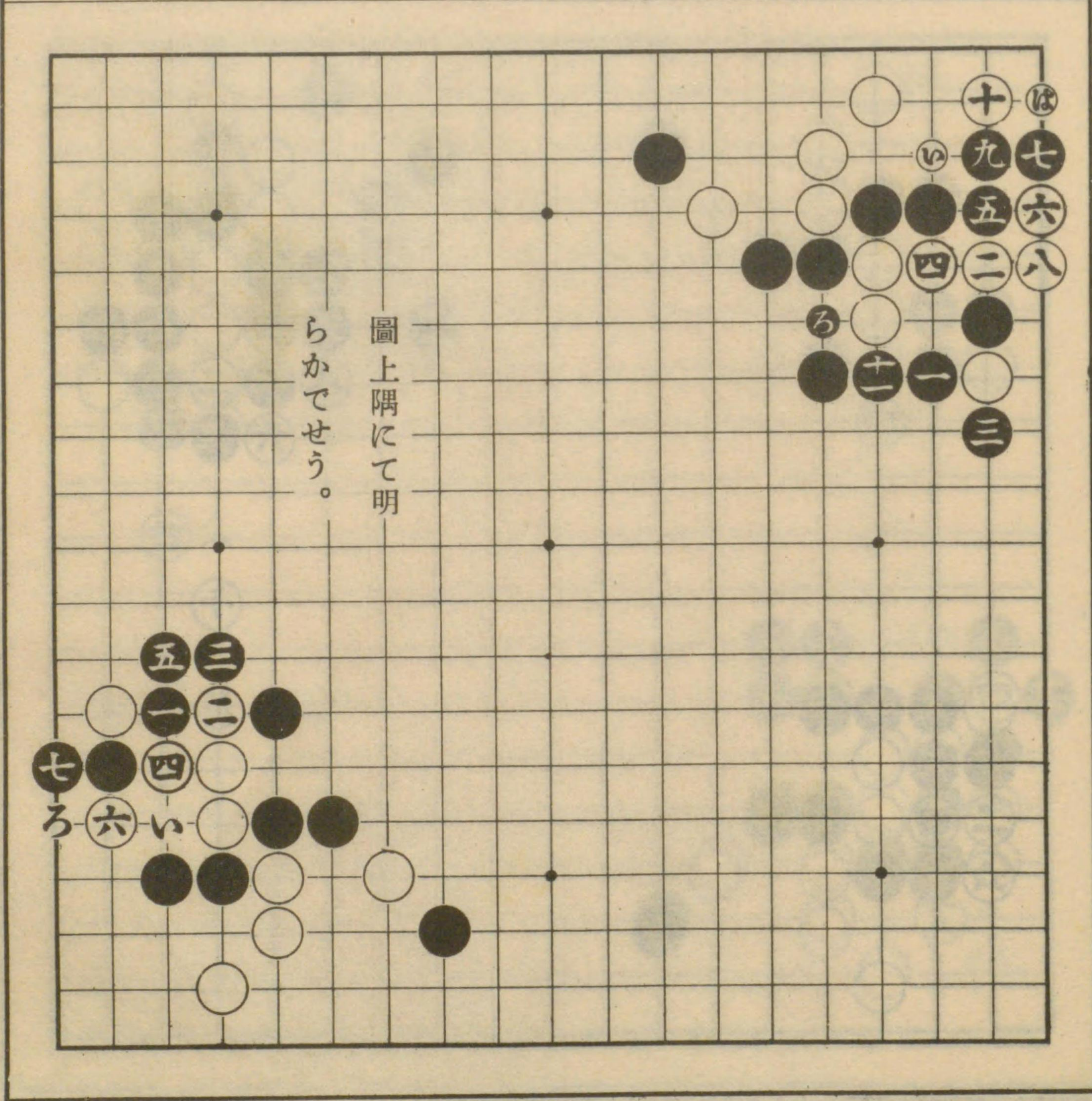
下隅白二は八迄となつて不充分です。黒は他日い・ろ何れより利かせるかを保留するが宜しい何れかを急いで打つてしまふのでは無意味です。そして白から先にはと打抜いても黒はに・ほその他何處で受けるか、如何様にも働かせる事が出來ませう。



（第百四十七圖）前圖下隅白四の變化。黒は五以下を打つて犠牲を大にしても、十一に次いで白い黒ろ白はと完全に極めつける事が出來る。前圖下隅よりも白の不利は一層であります。

下隅は白二を先にして四と切る變化ですが白の最悪なる形。黒七と下つて白に打様がありません。七に次いで白がいに粘いでもろと約へても結局取られる事を確められたい。

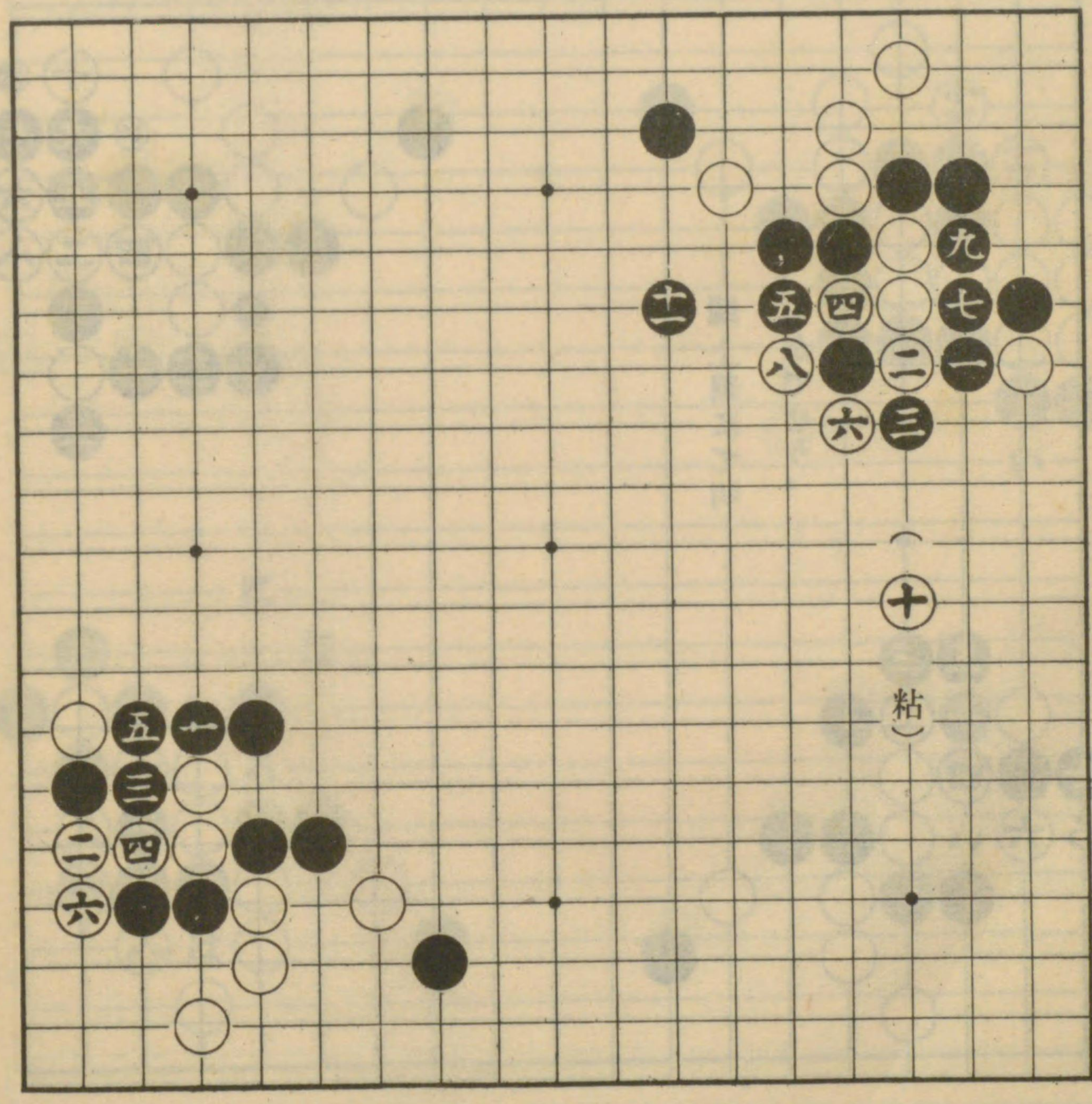
白の不利なる形はもう一つ次圖上隅がそれですがこれ等は決して黒一が良い爲でない事は前々圖上隅にて明らかでせう。



（第百四十八圖）白二・四と兩方の出を先にするは卽ち虛路を詰める所以に外ならず、黑七・九と絞られ、十一と飛ばれる事になつては前圖に劣らぬ白不利の姿であります。

下隅は黑一と約込んで見ました白二で三に突當り、黑五白二となつても黑が惡い事は第百四十五圖下隅に歸するので明瞭。

然し白二と夾み、四・六と二子を取られても、前々圖下隅乃至前圖上隅に比して黑の極めつけが完全でないだけに白有利と斷定されます。

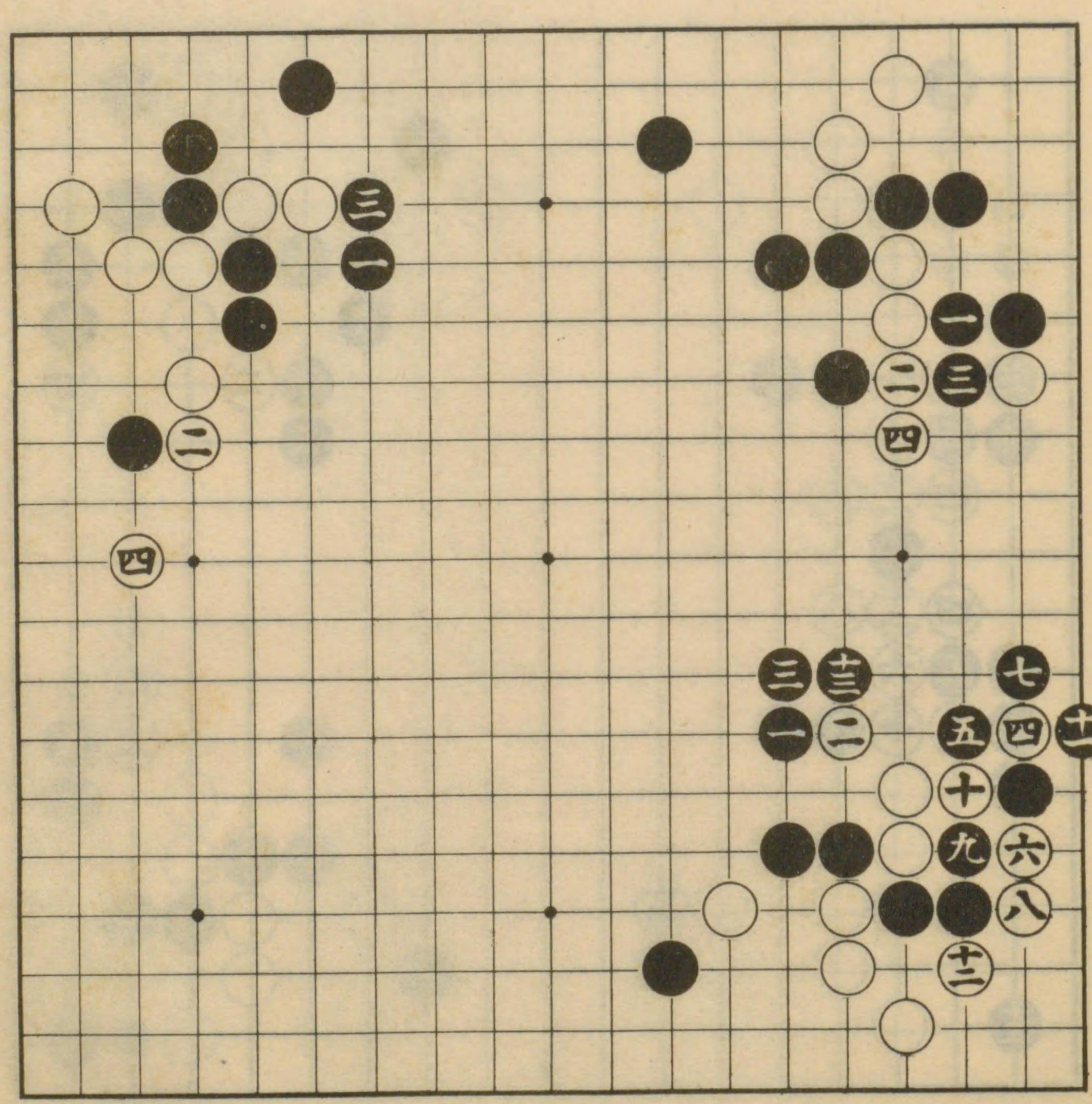


（第百四十九圖）黑一・三と打つて白二・四と突出される不利も論外とします。

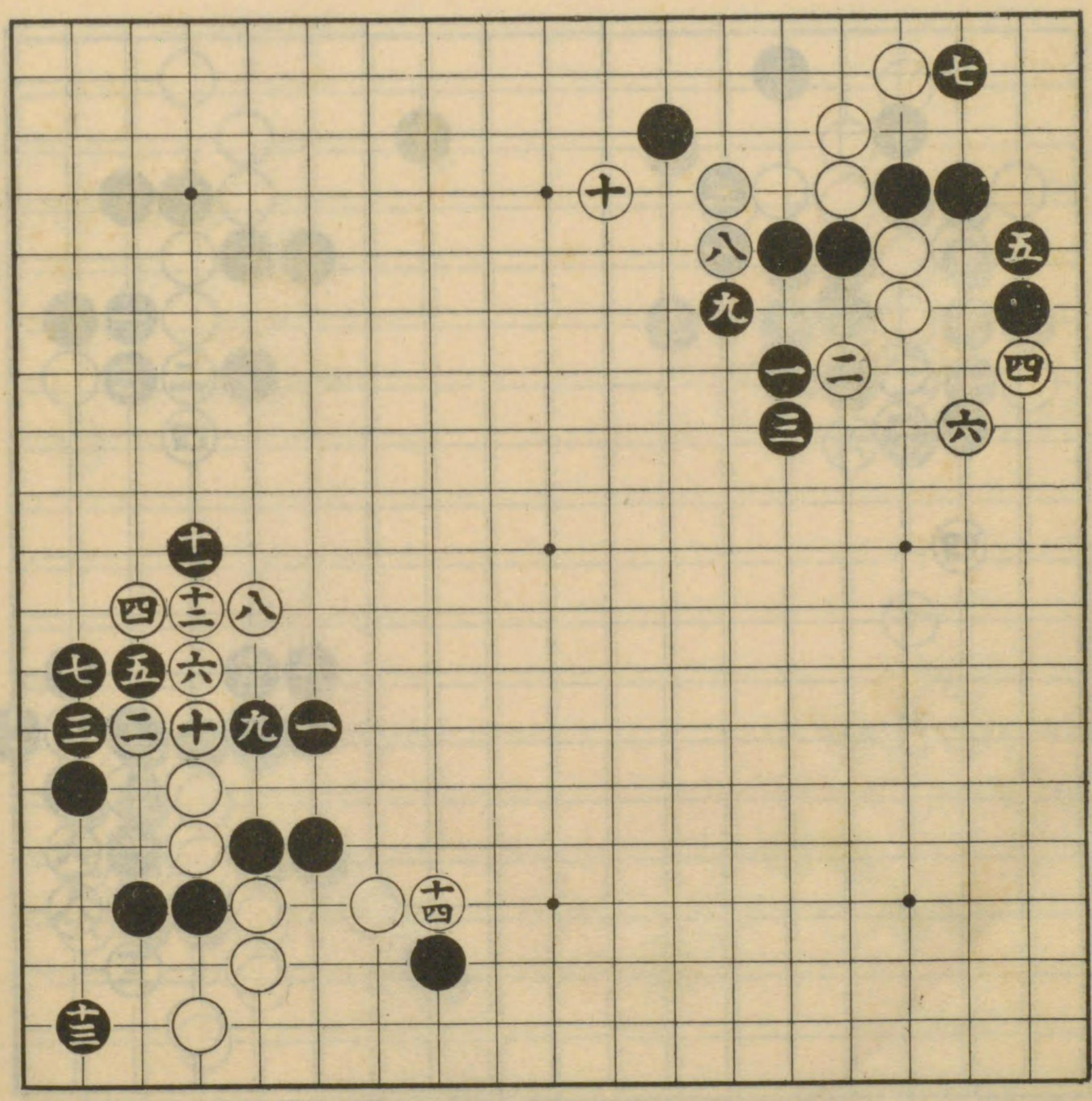
左上隅黑一に直接應ぜず白二・四と外す變化もあり得る。白の選擇權に屬し、四圍の條件に依ては時に用ゐられるでせう。

右下隅は黑一より變化。從來の二に掛けるに比し弛むのは已むを得ません。

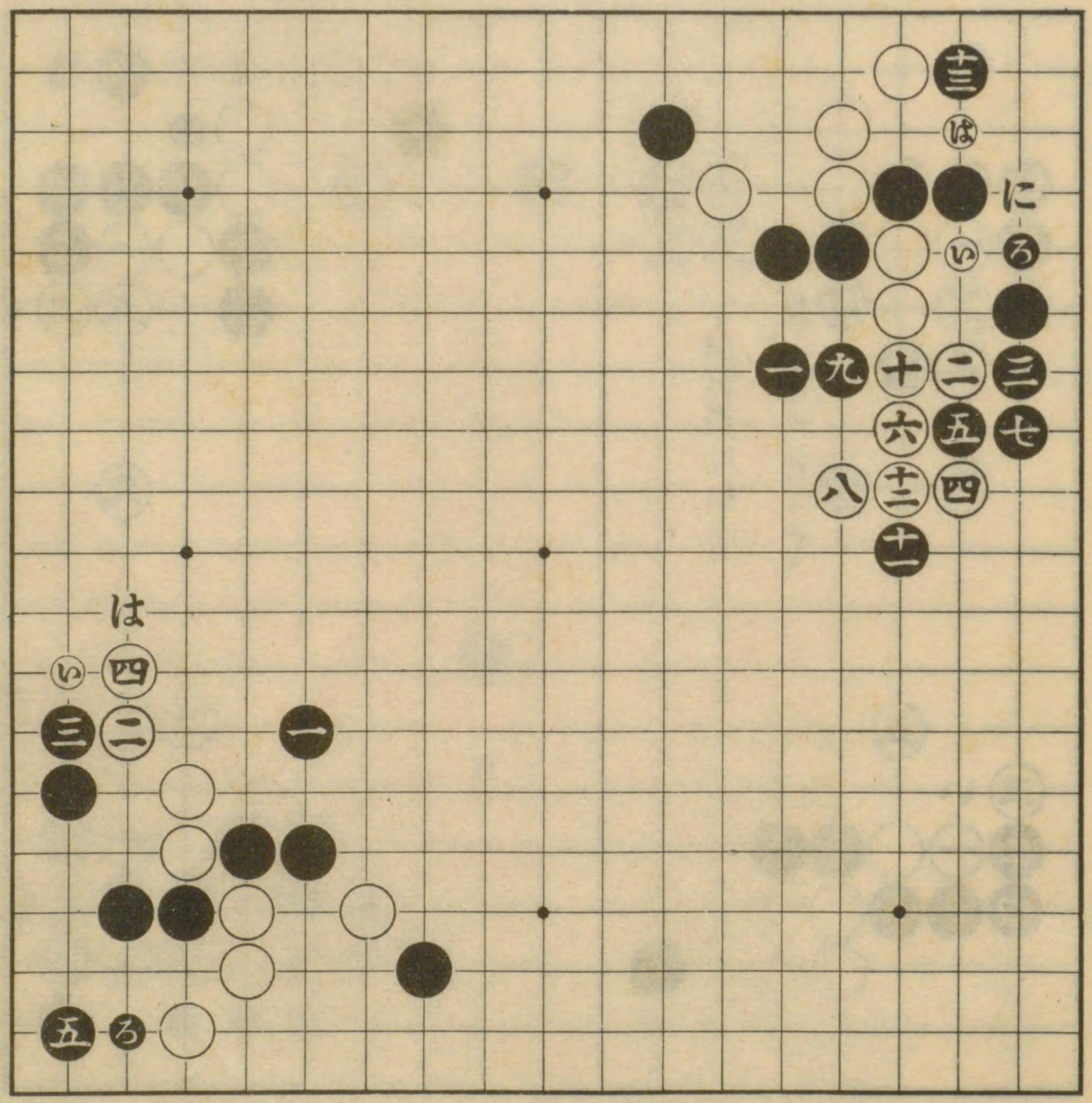
白二は著理。黑五・七と勢ひ振換ります。黑十三は碁の忙しい時には省略も可能ですが、斯く曲つて置くのは非常に手厚い姿です。黑も兎に角打てる形。



（第百五十圖）黒五と引くのは姑息です。白六は形。
黒七と飛頂けても隅は完全なる活きではありません。
白八と押される所が黒は辛い。
黒十一以降は明示の限りならねど黒疑ひなく不利。五は前圖下隅に從ふべきです。然しながら白二は著理なれど疑問でせう。白としては下隅二と尖むのが最善である。白四を五に行びると否とは局勢に依ります。
黒十三と活きた時に白十四と押す事になつて宜しい。猶次に。



（第百五十一圖）黒十三と飛頂けると白い黒ろ白はの手段があります。ろをにに弛めては眼形に關係する。これは參考までに留めて置きます。
下隅は白四と行びた場合。
黒五と直に隅を打てば白いを利かされる事を覺悟すべきです。いに對してはろを省略出來ません。怠ると白からろに突當られてその儘死。五に先だつていに押し、白は黒五ならばその患ひは無いが、三及びいと這はされる形も相當辛い樣です。結局白二が有力であるといふに歸する

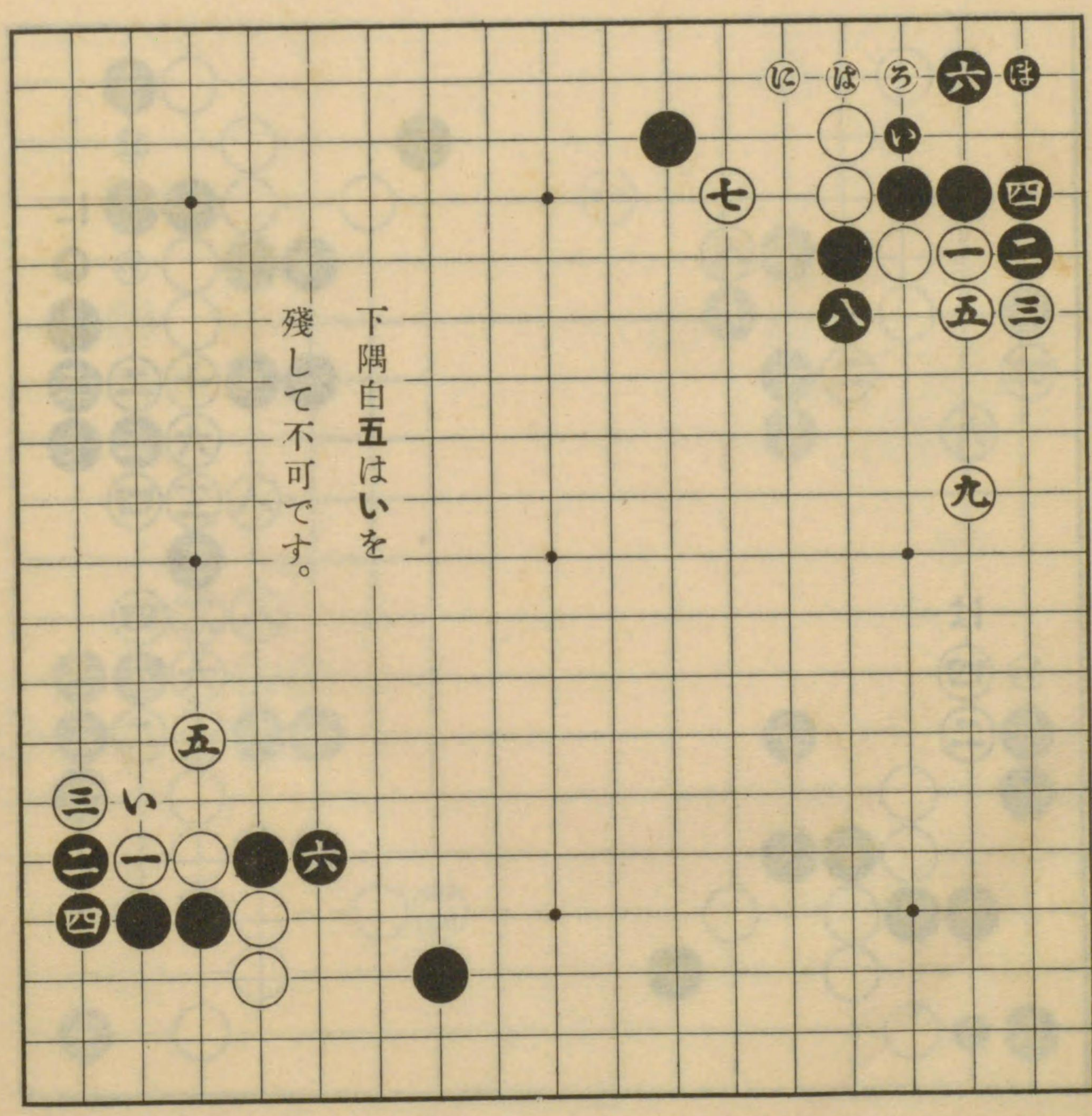


（第百五十二圖）白一と約込む型に入ります。從來所掲のものに比しては白に稍無理の傾きが多い事に先づ注意する。

黒二の綽ねは絶對です。

白三は後に示す如く四に切る方が良いのですが假りに三と約へて見ます。白五は此處を打つには斯く堅く粘ぐ外ない。下隅及び次圖參照。

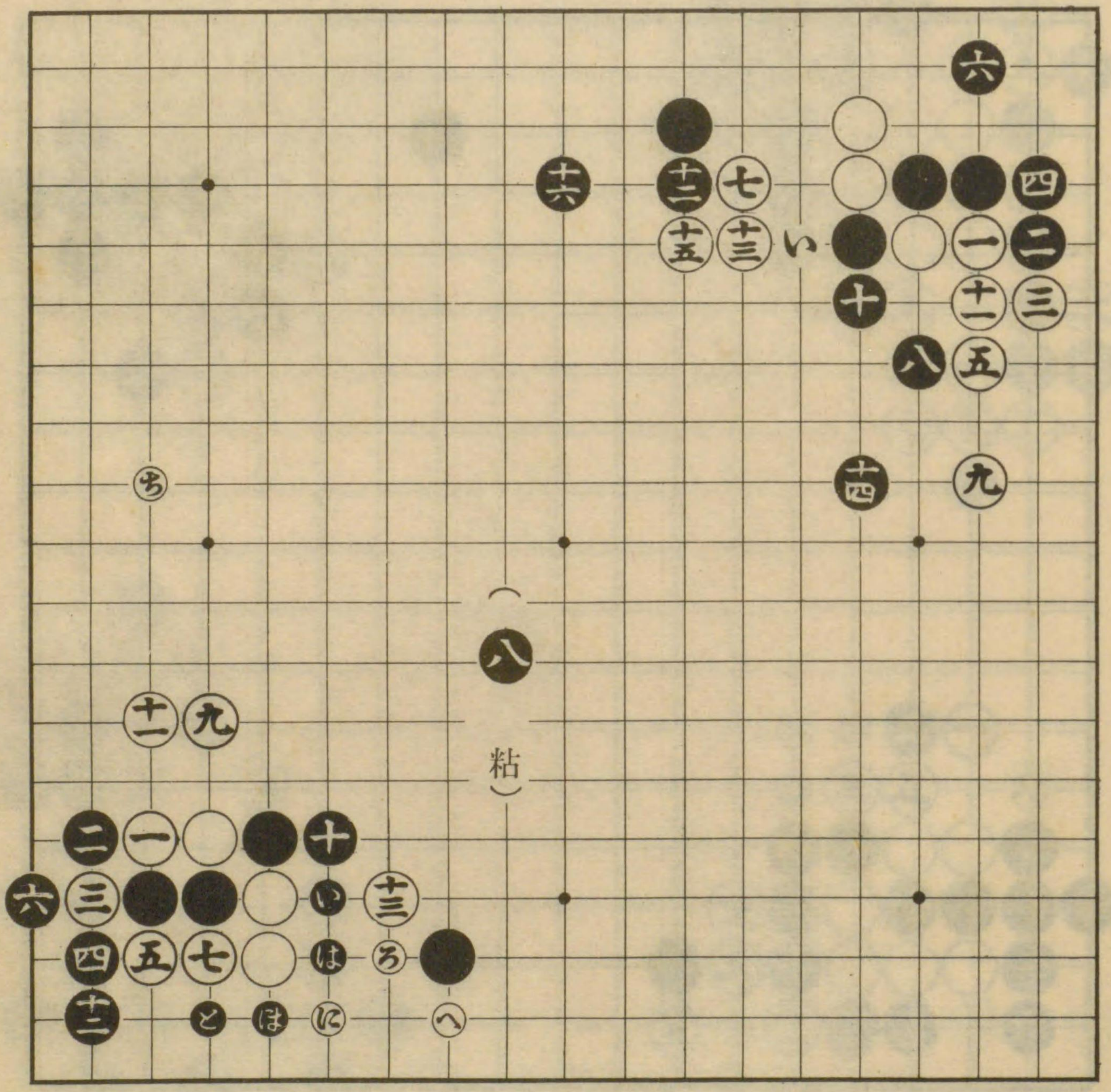
黒六も形。いに約へると白ろ黒六白は又はにを利かされる。六の後に白ろならば黒はと單に竝びます。白九まで、兩斷してゐるだけに黒は戰ひ得る理。



（第百五十三圖）白五の掛粘は好ましくありません。黒八と頂けられる著理があつて九・十一と屈する形は忍びない。然し九にて十から當てれば黒いにて直ちに七の方に影響が及びます。十六迄となつては明らかに白不利の結果である。

白は下隅三と切るが宜しい。五七と絞るに限ります。

白九は十一と兩様ある。黒十に就ては次圖上隅の變化もありますが本圖白十三は次に黒いならば以下ちまで四子は捨てる作戰であつて白優勢です。

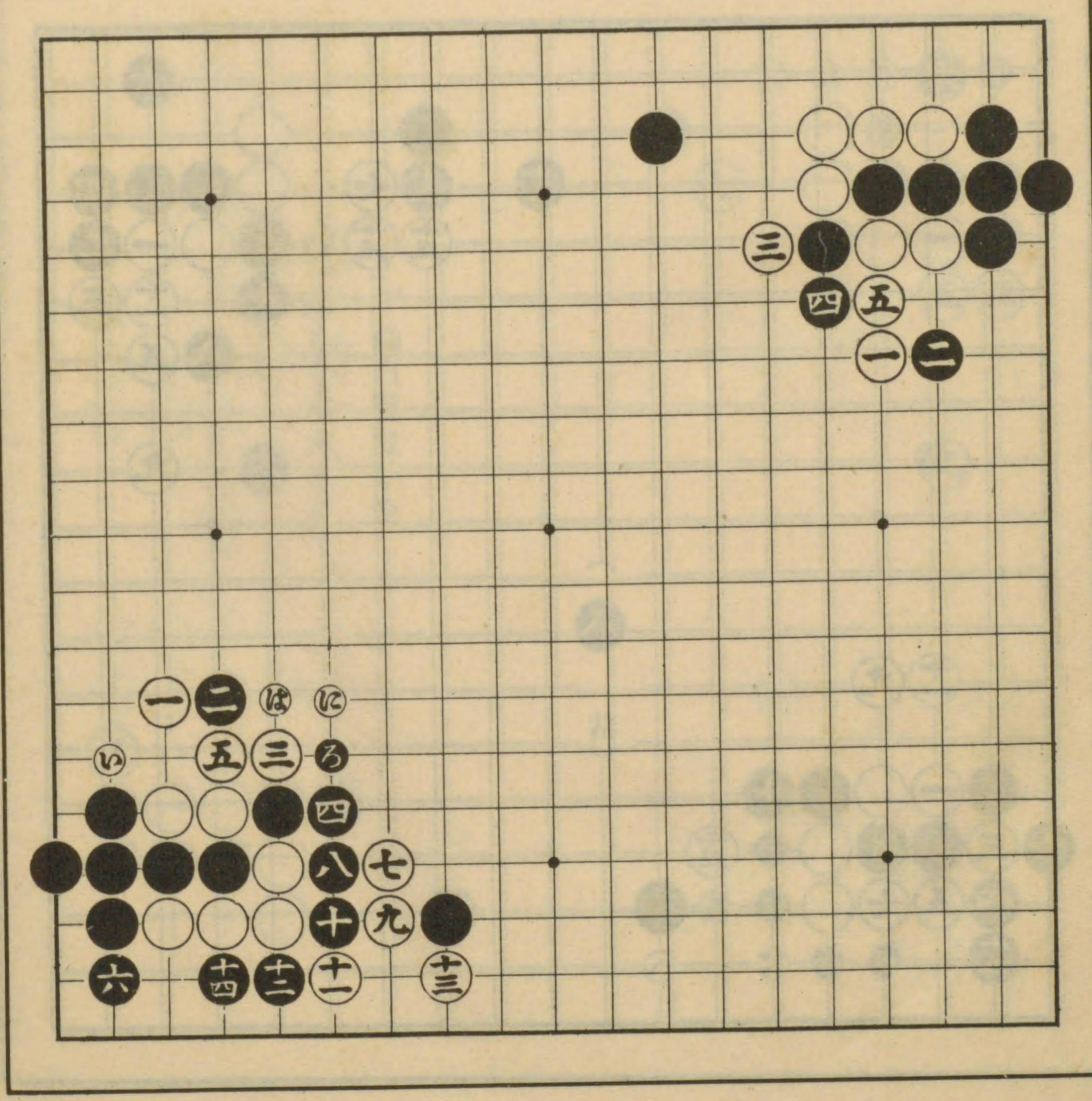


（第百五十四圖）黒二と頂けて來たならば白三・五と運ぶ。以下の經過は豫測を許しませんが白としては堂々戰ひ得る形です

下隅は白一と下の飛びを先にしました。黒二は著理。白三が至難の所です。若し三と當てれば以下黒十四までが想定される。

黒八以下を怠ると白㋑を利かされますから十四までは不得止。

但し白十三にて四以下を征に取られる場合にはその防ぎとして黒㋺白㋩の交換を先に强ひられる。黒の最も辛い所。然る際には十四に次で白㋥と曲つて置く

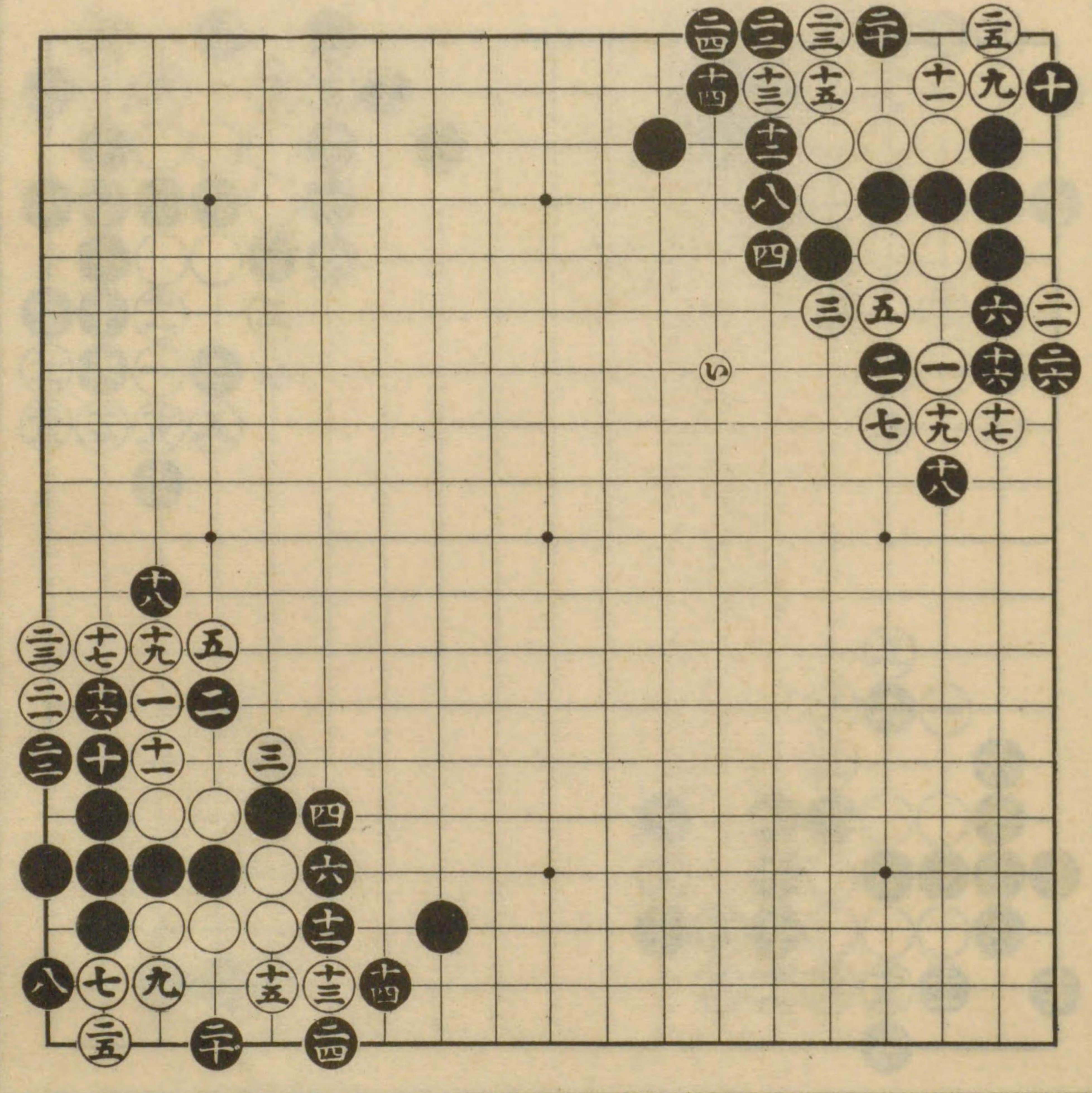


（第百五十五圖）黒六と行出す變化。但し白五にて七に綽ね黒八以下となる方が白としては働く理です。又然うなり得ます。なほ下隅參照。

黒二六まで、白先手持です。二一で二六に綽ねると逆に後手持となる。黒二六に次いで白㋑と打つ位でも惡くありません。

白十五を二十に粘いでも持。

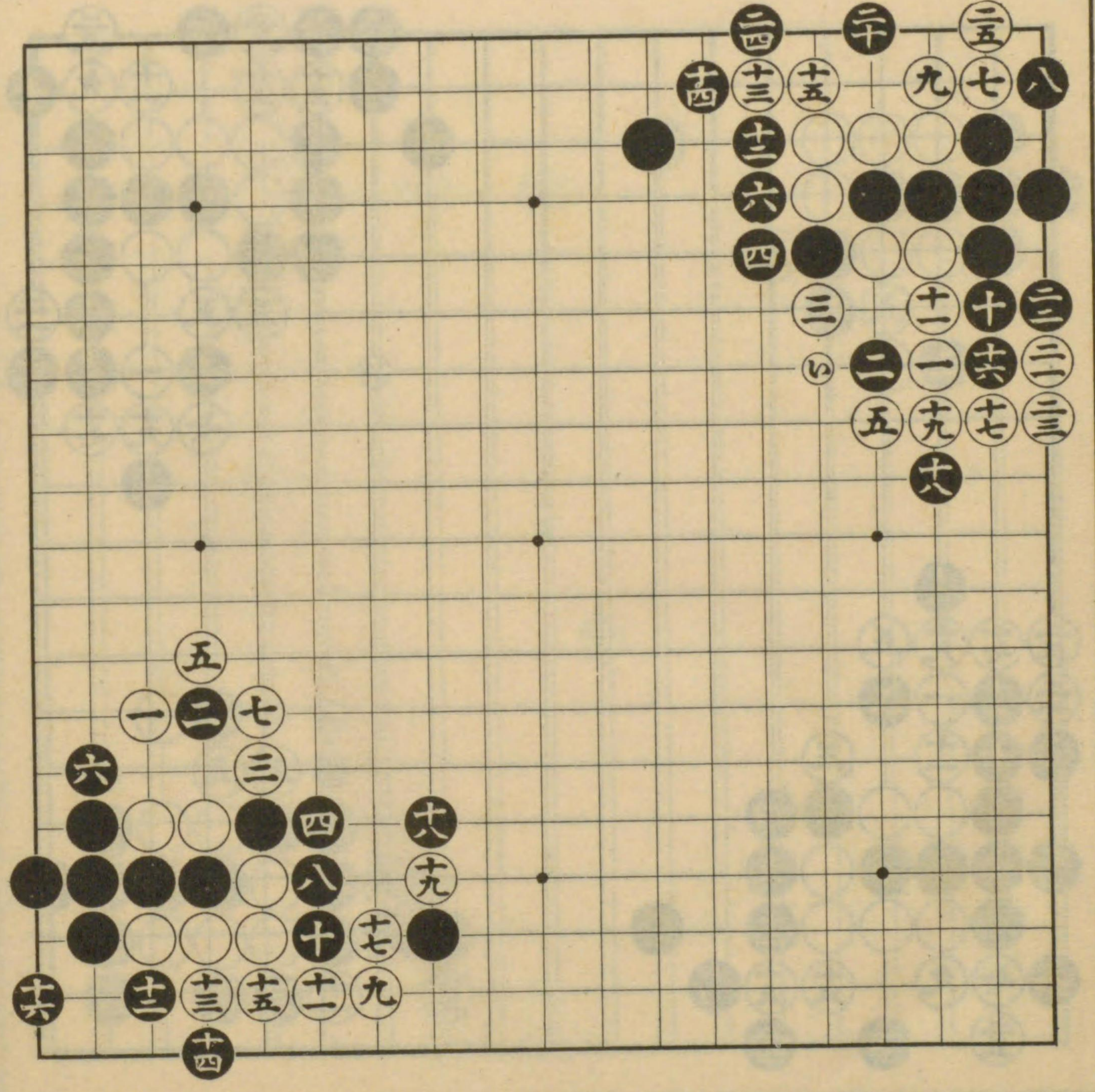
下隅は白五を先にしました。この時には黒六以下の手順肝要。次圖を參照せられたい。白十一は結局二五と下つて隅を劫で取らうとしたのです。なほ次に。



（第百五十六圖） 劫とは言つても手數が掛かつて大變ですから白**十一**は㋑から約へて手順は前後しても結局前圖上隅となる方が上策であります。

下隅白**五**の時黑**六**と出るは輕卒です。白**七**は勿論省略し得ませんが次いで黑**八**に對し白**九**と走る手がある。そして黑**十六**迄隅を活きた時白**十七**・**十九**と打たれて黑は窮するでせう。

白**五**と外から綽ねられた時には黑は必ず上隅**六**・**八**を先にして**十**と出る順序に依るべき事を忘れてはなりません。

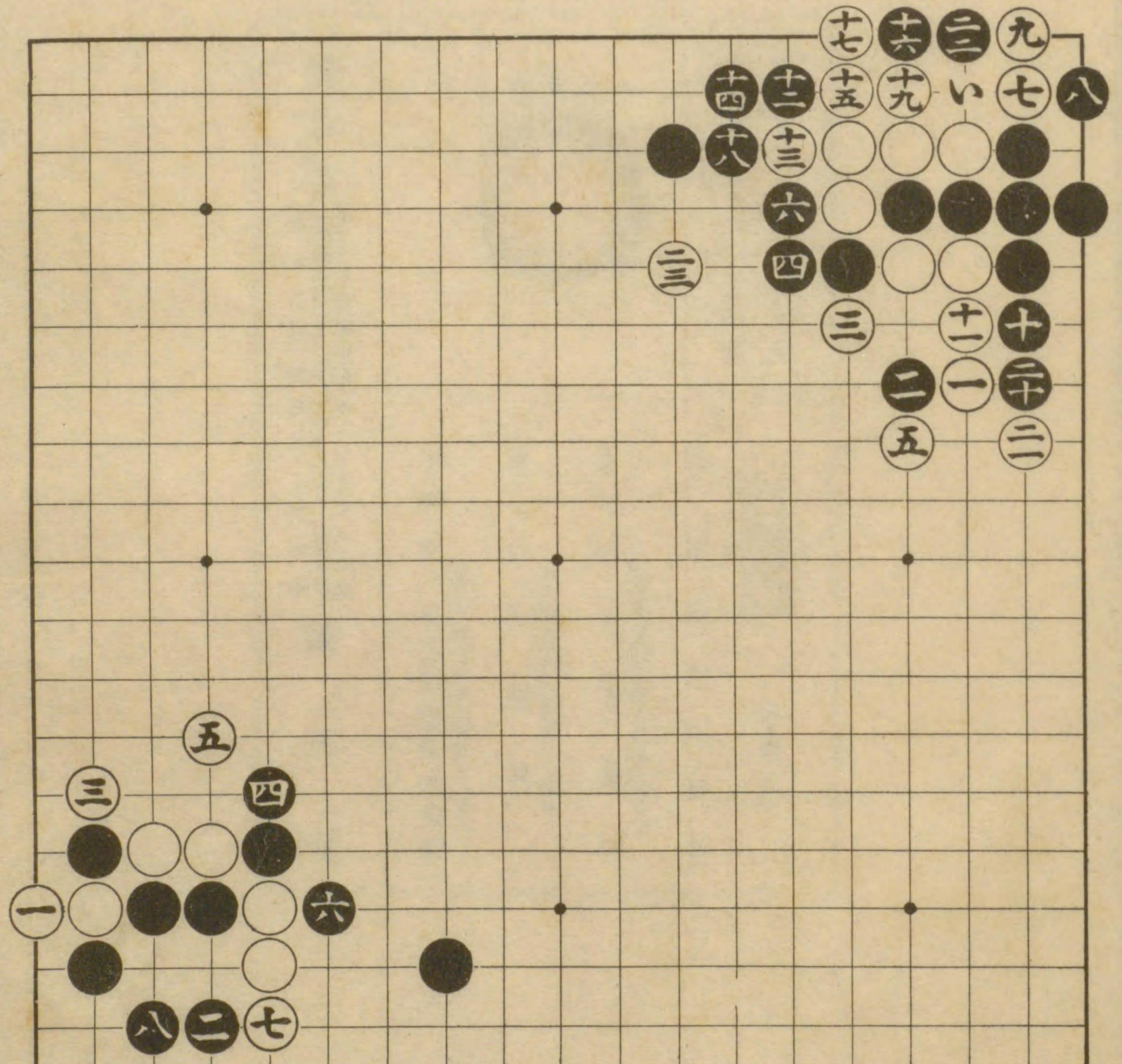


（第百五十七圖） 白**九**と下る變化があります。

黑**十二**を**十三**に約へては白**十二**と綽ねて活きられるから、**十二**と飛ぶのは絶對です。

白**十九**で**い**に粘ぎ、劫爭を挑むまでの事はありません。結局白が**二三**の急所を衝くことになつて滿足以上である。

下隅白**一**に對しては黑**二**と飛ぶ著理があつて、**六**まで、白の失敗です。白**一**は第百五十三圖下隅以降の切つて絞る型が最善。出切の變化として必要なるものを略掲げ盡しました。



互先定石下巻（完）

224
265

互先定石下巻（完）

昭和七年三月廿五日印刷
昭和七年四月三十日發行

著作權所有

名人圍碁全集
互先定石下巻

非賣品

著者　本因坊秀哉

發行人　東京市神田區錦町一丁目十九番地　小川菊松

印刷人　東京市芝區金杉新濱町十二番地　和田助一

印刷所　東京市芝區金杉新濱町十二番地　單式印刷株式會社

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地
電話神田四七一・三二一七・三二九六・四三三九
振替口座東京六二九四番
誠文堂